葉山村埋蔵文化財発掘調査報告書第２集

高知県葉山村

姫野々城跡 Ⅰ

―農山漁村活性化定住圏創造事業（公園整備）に伴う発掘調査報告書―

1995. 3

葉山村教育委員会

姫野々城跡発掘調査報告書

1995. 3

葉山村教育委員会

Cトレンチ堀状遺構完掘状況（南から）

Eトレンチ礎石検出状況（東から）

序

高知県葉山村は，高知県中西部に位置し，人口は4,871人（平成７年２月１日現在），農業を主体とした小さな村で，死亡者が出生数を上回る「人口自然減」状態が数年来続いています。平成６年１月には，“全国唯一の女性村長”が誕生，その一挙手一投足にマスコミの目が注がれていました。

平成５年６月，農林水産省の「農山漁村活性化定住圏創造事業」を受けて，葉山村指定文化財（史跡）「姫野々城跡」周辺を公園化する構想が持ちあがりました。「姫野々城跡」は，今から550年以上前，高岡郡内のほとんどを支配していたと言われる「津野氏」興亡の歴史を秘めている城跡で，今まで一度も発掘調査は行われていませんでした。

本書は，平成６年度に葉山村教育委員会が実施した発掘調査の成果をまとめたもので，広く一般に活用されるとともに文化財保護の一助になれば幸いに存じます。

おわりに，発掘調査にあたって指導・助言を頂いた高知県教育委員会，高知県埋蔵文化財センターをはじめ，専門家の先生方，ご協力・ご理解を頂いた地権者の皆様そして酷暑の中44日間にわたって調査頂いた作業員の皆様方に衷心より厚く御礼申し上げます。

平成７年３月31日

葉山村教育長　堅田　忠男

例　　言

1．本書は，葉山村教育委員会が平成６年度に実施した農山漁村定住圏活性化創造事業（城山公園整備事業）に伴う姫野々城跡試掘調査の発掘調査報告書である。

2．姫野々城跡は，高知県高岡郡葉山村姫野々886－１他に所在する。

3．発掘調査は，平成６年５月18日から７月20日まで実施し，引き続き，資料整理・報告書作成を８月１日から平成７年３月31日まで行った。発掘調査面積は，200㎡である。

4．調査体制は以下の通りである。

1）調査員

吉成承三　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　第３係調査員

2）事務担当

西森健一　(葉山村教育委員会　主事)

5．本書の執筆・編集は吉成が行った。

6．発掘調査にあたっては，地元葉山村の方々の献身的な協力を得ることができた。また，報告書作成では埋蔵文化財センター諸氏の助言をいただいた。記して感謝する次第である。

7．姫野々城跡の縄張り図作成については，池田　誠氏（中世城郭研究会）により作図していただき，現場では数多くの御教示をしていただいた。また，出土遺物・検出遺構等にあたっては，鋤柄俊夫氏（大阪文化財センター）・森島康雄氏（京都府埋蔵文化財センター）をはじめ中世土器研究会の皆様方ならびに木戸雅寿氏（安土城郭調査研究所）・中井　均氏（米原町教育委員会）をはじめ織豊系城郭研究会の皆様方に多大な御教示をしていただいた。併せて記して謝意を表したい。

8．出土遺物等の資料は，一部を除き高知県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。また，遺物の注記は調査略号94－９ＨＨである。

本 文 目 次

Ⅰ　調査の契機と経過 …… 1
　1．調査の契機 …… 1
　2．調査の経過 …… 2

Ⅱ　地理的歴史的環境 …… 4
　1．地理的環境 …… 4
　2．歴史的環境 …… 5

Ⅲ　調査の成果 …… 9
　1．姫野々城跡の概要 …… 9
　2．調査の方法 …… 11
　3．各トレンチの概要 …… 12
　　1）詰A区
　　Aトレンチ …… 12
　　Bトレンチ …… 13
　　Cトレンチ …… 13
　　Dトレンチ …… 17
　　Eトレンチ …… 17
　　Fトレンチ …… 19
　　Qトレンチ …… 20
　　2）B区 …… 20
　　Oトレンチ …… 21

Ⅳ　出土遺物 …… 23
　1）土師質土器 …… 23
　2）瓦質土器 …… 25
　3）国産陶器 …… 25
　4）輸入陶磁器 …… 26
　5）その他，瓦質土器・石製品・鉄製品・古銭 …… 27

Ⅴ　ま と め …… 41

挿図目次

Fig. 1　葉山村位置図 …… 1
Fig. 2　姫野々城跡周辺地形図 …… 3
Fig. 3　葉山村の地質図 …… 4
Fig. 4　周辺の遺跡分布図 …… 6
Fig. 5　姫野々城跡地形図 …… 9
Fig. 6　A区（主郭部分）地形図・
　トレンチ設定図 …… 10
Fig. 7　Aトレンチ東拡張区 …… 11
Fig. 8　Aトレンチ西拡張区 …… 12
Fig. 9　Cトレンチ堀状遺構平面図・
　石積み側面図 …… 15
Fig. 10　Cトレンチバンクセクション図 …… 14
Fig. 11　Dトレンチ平面図・断面図 …… 17
Fig. 12　Eトレンチ平面図・断面図 …… 18
Fig. 13　Eトレンチバンクセクション図 …… 19
Fig. 14　Fトレンチ平面図 …… 19
Fig. 15　Qトレンチセクション図 …… 20
Fig. 16　B区トレンチ設定図 …… 21
Fig. 17　Oトレンチ平面図・断面図 …… 22
Fig. 18　土師質土器・瓦質土器（羽釜）
　形態分類図 …… 28
Fig. 19　土師質土器小皿・皿・杯法量表 …… 29
Fig. 20　出土遺物1 土師質土器，
　小皿・皿 …… 34
Fig. 21　出土遺物2 土師質土器，皿 …… 35
Fig. 22　出土遺物3 土師質土器，杯 …… 36
Fig. 23　出土遺物4 瓦質土器，羽釜 …… 37
Fig. 24　出土遺物5 備前焼，
　瓦質土器（こね鉢） …… 38
Fig. 25　出土遺物6 輸入陶磁器，
　青磁・白磁・染付 …… 39
Fig. 26　出土遺物7 染付・瓦質風呂・
　石硯・鉄製品・古銭 …… 40
Fig. 27　姫野々城跡縄張り図 …… 43

表目次

Tab. 1　出土土器法量表1（図版No. 1～26） …… 30
Tab. 2　〃　2（図版No.27～52） …… 31
Tab. 3　〃　3（図版No.53～78） …… 32
Tab. 4　〃　4（図版No.79～101） …… 33

写 真 目 次

P.L. 1　姫野々城跡遠景（西方より）
　　〃　　（南方より）…… 51
P.L. 2　詰ノ段調査前全景（東より）
　　詰ノ段A・Bトレンチ全景（東より）…… 52
P.L. 3　詰ノ段Aトレンチ東拡張区（東より）
　　〃　　西拡張区（　〃　）…… 53
P.L. 4　　〃　　青磁出土状況
　　〃　　染付　〃　…… 54
P.L. 5　二ノ段Oトレンチ堀状遺構検出状態（南より）
　　〃　　石積み部分（東壁）…… 55
P.L. 6　〃　Eトレンチ礎石遺構（東より）
　　〃　　南壁セクション（北より）…… 56
P.L. 7　　〃　　土師質土器出土状況
　　〃　Fトレンチ礎石検出状況（東より）…… 57
P.L. 8　B区伐採作業風景
　　〃　丘陵南尾根部（北より）…… 58
P.L. 9　〃　Gトレンチ　（南より）
　　〃　Hトレンチ　（北より）…… 59
P.L. 10　〃　Pトレンチ　（北より）
　　〃　堀切3　　（西より）…… 60
P.L. 11　詰ノ段Aトレンチ調査風景（西より）
　　〃　Fトレンチ　〃　（東より）…… 61
P.L. 12　土師質土器1　小皿・耳皿・皿 …… 62
P.L. 13　　〃　　2　皿・杯 …… 61
P.L. 14　　〃　　3　杯・瓦質土器　羽釜 …… 64
P.L. 15　備前焼　播鉢・甕・瓦質土器　擂鉢 …… 65
P.L. 16　青磁・青白磁
　　〃　裏面 …… 66
P.L. 17　染付
　　〃　裏面 …… 67
P.L. 18　白磁・石硯・瓦質風炉・鉄製品・古銭 …… 68

Ⅰ　調査の契機と経過

1．調査の契機

葉山村は，高知県の中央西よりに位置し，北面は東から佐川町・越知町・仁淀村，西方は東津野村，南に大野見村，東は須崎市に境を接している。村の周囲を山々が囲み，中央部には新荘川が西東に流れ，国道197号が川に並走している。

かつての国道197号には，曲がりくねった過酷な坂「布施ケ坂」があり，東津野・梼原方面へ赴任を命じられた教師・役人がこの坂に驚いて引き返し辞職願いを出したことから「辞職坂」とも呼ばれていた。現在は，須崎中学校前から梼原町役場まで44.7㎞，車で約一時間で結ばれている。

新荘川の両岸には河岸段丘が形成されていて，段丘面上には集落・耕地が開け，山地は森林の育成に適している。古くから，楮（こうぞ）・三椏（みつまた）の栽培が盛んで，手すき和紙の産地として知られ高知県無形文化財にも指定されているが，現在では，わずか一軒だけになっている。

村の産業形態は，第一次産業である農林業が主体であり，やっこネギ・ニラ等の雨よけハウスの施設園芸を中心に，露地ではシシトウなど棚田を活用した栽培を行っているが，農耕地は総面積のわずか11.6％で，農林業が村の大きな産業基盤でありながら面積は少なく，生産額も落ち込んでおり「生産条件の不備」「農業経済力の弱さ」などから，須崎市内に勤めに出る兼業農家も珍しくなく，27％以上という高齢化率がそれを後押しする形になっている。

この葉山村には，中世，高岡郡一帯を治めていた津野氏により築かれたとされる姫野々城跡が存在する。中世城郭として，その景観の壮麗さをはじめ周辺城下町を含めた学術的価値は計り知れないものがあり，地元葉山村における文化財の中ではシンボル的存在として位置付けられている。この他にも歴史的に高く評価されるべき文化財が存在する地域でありながら，近年，村の地域振興発展のために道路網を中心とした産業基盤整備など開発の手が及び，遺跡自体，蚕食されながらその姿を失いつつある。

こうした中，姫野々城跡が立地している丘陵にも農山漁村活性化定住圏創造事業による城山公園整備計画が持ち上がった。計画では城跡の立地している丘陵を山に派生している自然林と共に，姫野々城跡の歴史的景観を生かし，城山を訪れた人たちが散策しながら歴史・自然などを学べる公園に整備するという目的であり，具体的には丘陵尾根部における遊歩道の設置，詰ノ段にあたる山頂部に城の機能していた時期の建物及び施設等を復元するというものであった。

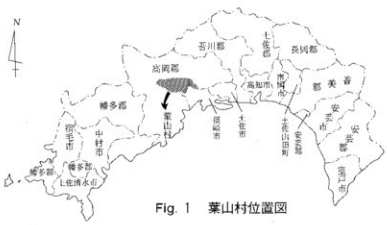


Fig. 1　葉山村位置図

これに先立ち，文化財保護の立場から葉山村文化財保護審議会・葉山村教育委員会，ならびに高知県教育委員会では，葉山村産業課と協議を重ねた結果，計画地が村史跡であるということをふまえ，事前に城跡内における遺構の広がりをはじめ，城跡の時期や性格，遺物の分布密度など姫野々城跡を理解するための基礎的データを得る試掘調査を実施する必要性に迫られた。このため葉山村教育委員会では平成６年度に国庫補助金を得て，遊歩道計画ルートである丘陵南尾根部及び，山頂部を中心に城跡の縄張り調査及び試掘調査を実施することとなった。しかし，葉山村教育委員会には埋蔵文化財の専門職員が配置されておらず，発掘調査には(財)高知県文化財団埋蔵文化財センターからの調査員の派遣を受け，平成６年５月18日より調査を行なった。

２．調査の経過

今まで葉山村で埋蔵文化財発掘調査が行なわれたのは，岡本健児氏による昭和47年，現在の国道197号線改良工事に伴う新土居遺跡の発掘調査があり，続いて昭和52年に永野遺跡，さらに，昭和57年度には，岡本健児氏・宅間一之氏・山本哲也氏らによる個人宅地造成中に発見された姫野々上町遺跡の発掘調査があげられる。そして，昭和58年度に実施された国営新農業構造改善事業に伴う新土居宇津ケ巌遺跡の発掘調査以来，本格的な発掘調査は行なわれていない。今回の姫野々城跡の発掘調査は，実に11年ぶりに葉山村における歴史的変遷について新知見をもたらすこととなった。

姫野々城跡の発掘調査は，平成６年５月18日から同年７月20日までの約２ヵ月間現地調査を行なった後，引き続き平成７年３月まで整理作業及び報告書刊行の予定で行なわれた。調査体制は以下のとおりであった。

調査主体　葉山村教育委員会
調 査 員　(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
　　調査第３係　吉成承三
調査事務　葉山村教育委員会
　　教 育 長　　堅田忠男
　　事務担当　　西森健一・大崎信幸
現場作業員　大崎一心・西森　啓・宮本清助・高橋武男・石川太幸・山崎健児・谷脇千尋
　　大崎　徹・大崎淳一・高橋一六・松尾政顕・橋田善廣・林　佳彦・山崎温英
　　長山衛祐・鍋島雅俊
整理作業員　田中さおり・福井由美

なお，整理作業にあたっては，大原喜子・山中美代子・岡村真由紀・東村知子の協力を得た。

発掘調査は，平成６年４月28日の現地踏査から始まり，５月17日に発掘器材を搬入，設営し，翌日の５月18日から調査を開始した。調査は，人力により丘陵南尾根部（Ｂ区）及び，山頂部平壇面（Ａ区）を中心に行なったが現場は急峻な地形及び，雑木等が生茂り困難をきわめた。また，調査区設定においても植林，自然林保護のため，これら樹木の間に調査区を設定せざるをえなかった。以後，酷暑を通じての調査であったが，梅雨，台風の影響も受け最終的に調査を終了し現地を撤収したのは，８月４日であった。現地調査後の整理作業及び報告書作成は，高知県立埋蔵文化財センターの施設において行なわれ平成７年３月31日をもってすべての作業を終了した。

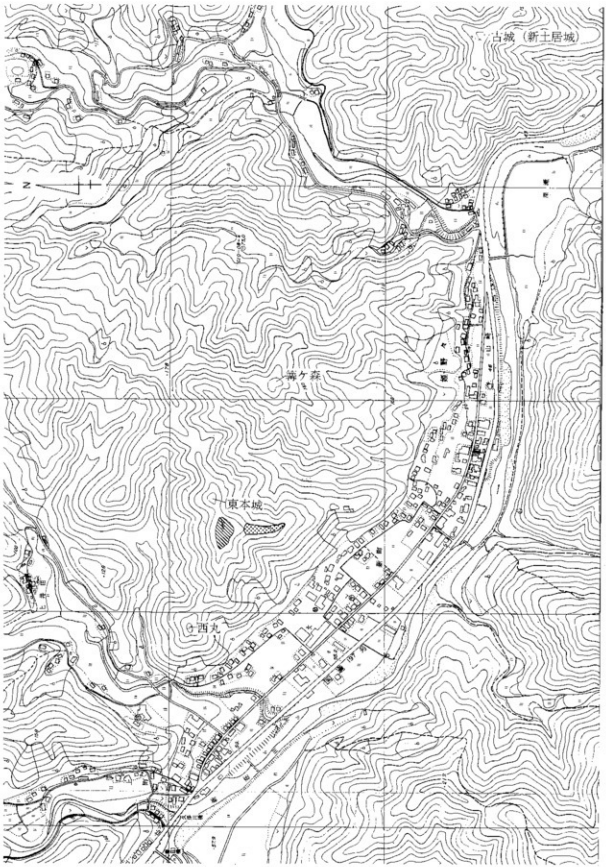


Fig. 2　姫野々城跡周辺地形図

Ⅱ　地理的歴史的環境

1．地理的環境

姫野々城跡は，高知県高岡郡葉山村姫野々に所在し，新荘川の中流左岸に開けた河岸段丘の北，標高192mを測る小山丘上に立地する。葉山村周辺の地形を見れば，村の中央部をほぼ東西に流れる新荘川を軸として北部山地と南部山地とにわかれた大きな地溝帯を形成している。北部山地は標高1000m級の急峻な山々が東西にのび，鶴松森・黒川森・石槌森・鰐柁森といった峰々が連なる。これらの北部山地は秩父古生層を主として砗岩・石灰岩等より成る断層崖部分と，その山麓に連なる中生層の砂岩・泥岩を主とする標高400m前後の低い山地より成る。この古生層と中生層の境界線が仏像構造線である。南部山地は中世層砂岩・泥岩を主とする地域であって標高500m前後の比較的なだらかな山地である。これらの山地から葉脈の様に24の支流が新荘川に流れ込んでおり，地形図を見れば，あたかも村名に由来する一枚の広葉樹の葉のような形を呈している。新荘川の村内を流れる部分は約20kmであり，川の屈曲に沿って姫野々・梶足石原野・鍵野々・舟野・大野といった大小の河岸段丘が分布している。

地質をみれば，仏像構造線以北は虚空蔵山層群と呼ばれる地層であり，仏像構造線以南は半山層，その南には須崎層が分布している。これらの地層の走向はほぼ東西に走っており，葉山村は，ちょうど秩父帯と四万十帯の境界線上にあたる。三宝山層群は，主に砂岩・チャート・凝灰岩・石灰岩で構成されており，鶴松森から鰐柁森にかけて岩脈が東西にのびる。村の面積の約半分を占める半山層は，仏像線と東川断層の間を東西に帯状に分布しており，当城跡が立地している丘陵は半山層群に含まれる。下位層より基底礫岩・砂岩・砂岩泥岩互層・レンズ状礫岩を含む砂岩で構成されている。本層は，村内だけでなく県内の仏像線の南に沿って東西に帯状に分布しているが，模式地は葉山村馬関・姫野々・三間川を含む仏像線に至る地域とされている。須崎層は，砂岩・泥岩・赤色

Fig. 3　葉山村地質図（『葉山村史』葉山村の地質より転載）

泥岩・チャート・石灰岩・玄武岩・輝緑凝灰岩等からなり，東川断層を境として南部に分布する広大な地層である。また，村内の段丘面には地下１ｍ程の所にオンデ層が堆積している。

城跡の立地している姫野々は，標高50ｍ前後を測る河岸段丘面上に集落・耕地が開けており，詰ノ段のある山頂部との比高差は130ｍ前後を測る。詰ノ段のある山頂部は標高192ｍを測り東，西，南に尾根筋が伸びており，城跡の南側斜面据部にはいくつかの小谷が存在する。斜面部は急峻であり，特に南西側斜面部は急傾斜している。頂部からは，東方に三間の川・新土居が，西方は本村，遠くに鶴松森を望むことができ，それぞれ新荘川に沿って東方，西方への眺望が開けている。

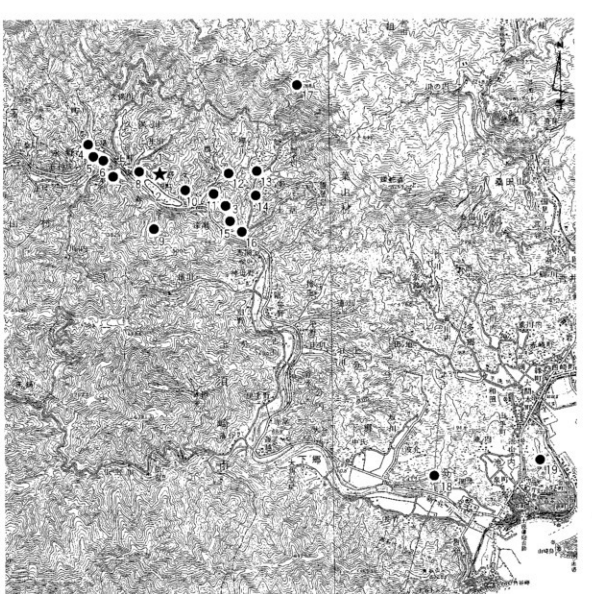
２．歴史的環境

葉山村を含め新荘川流域には，いくつかの河岸段丘が形成されており，その段丘面上に遺跡が存在している。ここでは，姫野々城跡周辺の遺跡についてその歴史的変遷を述べたい。

村域最古の遺跡は新土居遺跡であり，縄文時代早期の無文厚手の鳥島式土器と，それに伴う打製石鏃が出土している。早期に続く前期・中期の遺物も，この新土居遺跡と上流の永野遺跡から発見されている。永野遺跡は，昭和52年に国道197号の改良工事に伴って発見された遺跡である。この遺跡からは遺構の検出はなかったが，縄文時代中期初頭の船元Ⅰ式・Ⅱ式土器を中心とする遺物が検出された。この他に前期・後期の縄文土器も検出され，この遺跡が縄文時代を通じて存続していたことが判明した。特に，永野遺跡出土の船元Ⅰ式土器に伴う打製石鏃は，当地方では産出しないサヌカイト製の比率が高いことが注目される。また，昭和58年には，永野遺跡の東方3.2㎞の所に新土居宇津ケ藪遺跡も発見され，この遺跡からは永野遺跡に続く縄文中期中葉の土器・石器が出土している。高知県下には多くの縄文遺跡が発見されているが，縄文中期の遺跡は少なく，これらの遺跡は県内の縄文時代中期の変遷を知る上で代表的な遺跡といえる。

弥生時代に目を向けると，昭和58年永野遺跡の耕地整理中の水田から土器片が発見され，緊急発掘調査が実施されている。確認された遺構は，不整形の土坑状遺構・ピット等であり，遺物は弥生前期末～中期前半の土器が注目されるものとして出土している。前期末の土器は瀬戸内の阿方式土器系統で，高知県では大篠式土器と呼称されているものである。薄手で堅緻なつくりの壺型土器は，高知県の西部の遺跡で比較的多く出土しており，大篠式土器の中でも西の地方において生まれたタイプのものと考えられる。中期の甕形土器は，愛媛県西部の前期後半の甕形土器にきわめて類似しており，これらの土器は県西部の影響を考えるよりむしろ愛媛県西南部，さらには大分方面いわゆる豊後水道両岸文化の影響を受けていると考えられ，この土器文化流入ルートが，須崎市波介遺跡で発見された朝鮮系の細形銅剣をはじめ，村内の三島神社及び白雲神社で神宝として所蔵されていた中細銅剣らと伴に，細形銅剣の流入ルートとも一致するものと考えられる。永野遺跡は，こういった豊後水道両岸文化の流入ルートを知る上で貴重な遺跡であるとともに，この山間地方における弥生前期末の農耕の実態を追求していく上で重要である。弥生時代後期は，姫野々上町遺跡において，後期土器の出土が若干みられる。

古墳時代の遺跡は，村内においては現在のところ確認されておらず，弥生時代後期～古墳時代にかけての遺跡は，新荘川下流域，須崎市のある平野部に存在するようになる。



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	姫野々城跡	中世	8	姫野々上町遺跡	獏・続・帷	15	永林寺跡	中世
2	津野氏土居跡	〃	9	法真坊跡	中世	16	新土居遺跡	縄文
3	古城（新土居城）跡	〃	10	聰松院茶寮森	〃	17	城台山城跡	中世
4	永野遺跡	獏・帷	11	種玉庵跡	〃	18	岡本城（巣ノ森城）	〃
5	高徳様	中世	12	樽ノ川五輪塔群	〃	19	須崎城	〃
6	繁国寺跡	帙～帷	13	円通寺跡	〃			
7	葉山本村遺跡	中世	14	新土居字津ケ藪	縄文			

Fig. 4　周辺の遺跡分布図

中世の遺跡は，今回，調査を行った姫野々城跡をはじめ，新土居の古城，佐川町との境に存在する城台山城跡など中世山城と，繁国寺，聴松院，永林寺などの中世寺院跡や，葉山村姫野々に所在する津野氏の土居跡などがみられる。いずれの遺跡も，中世を通じてこの地域を支配していた津野氏に関係する遺跡であるが，いままで発掘調査は行われておらず今回の姫野々城跡の発掘調査がこの時期の変遷を知る上での端緒となった。

津野氏の由来については，伝承によると延喜13年（913），藤原仲平の子山内蔵人経高が伊予から入国して，楮原・津野山を本拠としてその勢力を伸ばしたとういう説と，平安時代後半に成立したと思われる津野荘（現在の須崎市多ノ郷，吾桑地区）から新荘へと発展したという説などがありはっきりしない。津野荘は，「勘中記」紙背文書によると，康和２年（1100）高岡郡吾井郷津野村（津野保，須崎市）に京都賀茂御祖社の荘園として成立し，佐伯文書によると，その後，荘域を西へと拡大して，鎌倉時代末期には「津野新荘里方」に対して葉山，津野山方面を「津野新荘山方」といった記載がみられ，南北朝末期には楮原方面も新荘内に組み入れられている。「長元期」によると応仁の乱後，津野氏も津野荘を侵略して，やがて葉山を中心として勢力を伸ばして，高岡郡西半部を支配圏に収め「津野五千貫」といわれるくらい拡大する。津野氏と津野荘の関係については史料が少なく，津野繁高以前は伝承が多く津野氏の入国や系譜についても諸説があって定説がない。

姫野々城跡は，中世における津野氏の本城跡と伝えられており，築城年代は不詳であるが南北朝時代の山城であると推定される。天正16年（1588）の津野半山地検帳によると，津野氏は城山の南麓中央部に二反の土居を構え，その南に五反二七代四歩の広大な弓場を備えていた。土居を中心として西に長林寺・三島神社，東に聴松院，中央部に良徳院・道場・聖音院などがあり，家老津野藏人をはじめとする家臣の屋敷群がある。「賀茂御祖皇大神宮諸国神戸記」所収の応安５年（1372）９月８日付けの津野繁高請文によると，津野本荘（現須崎市）が繁高の地頭請となり，永和元年（1375）から康暦２年（1380）に至る四通の津野浄高の所領宛行状や代官職安堵状（蠹簡集拾遺）では，備前守浄高が東は多ノ郷（現須崎市）から西は楮原（現楮原町）までの地やその代官職を家臣らに宛行っている。姫野々はこれらの地を押える要所に位置していることから，南北朝時代の繁高の頃には居城は当地にあったと考えられている。津野氏は，繁高の後「十八代記」によると浄高－元高－春高と継ぎ，之高が伊予の河野氏から入って春高の養子になっている。室町時代には津野氏は津野荘全域を完全に支配下に置いたが，永正14年（1517），一条氏の家臣であった福井玄蕃の守る戸波城（現土佐市）を攻撃した恵良沼の戦いや，天文年間（1532～1555）の一条氏との戦いで敗退し，津野氏は一条氏に降伏し，所領は安堵された。その後，元亀元年（1570）仁淀川合戦で長宗我部元親と戦ったが敗退し，長宗我部氏の土佐統一にはその傘下に入り，長宗我部元親の三男である親忠を津野勝興の養子として迎え入れた。親忠は慶長年間（1596～1615）に城を葉山姫野々から須崎に移したと伝えられているが，慶長５年９月の関ケ原の戦いに敗れた長宗我部盛親に切腹を命じられ，津野氏は滅亡する。

以上，当村域における縄文時代から中世にかけての変遷について述べてきたが，発掘調査が行われた遺跡は僅かであり，考古学の視点では，資料の蓄積に乏しい。しかし，今回，実施された姫野々城跡のように発掘調査によって得られる資料により，歴史的環境が，除々にではあるが解明されつ

つある。

《参考文献》

葉山村教育委員会 『葉山村史』 1980年
岡本 健児・宅間 一之・山本 哲也 「一姫野々上町・新土居宇津ケ藪・永野遺跡ー 埋蔵文化財発掘調査報告書』 葉山村教育委員会 1984年
『高知県の地名』 平凡社 1983年
『角川日本地名大辞典』 角川書店 1986年
国史研究社 『土佐物語Ⅰ・Ⅱ, 四国軍記』 黒川 眞道編集 1914年
重松 実男 『稿本 津野氏遺要』 1952年
深尾 叶 『津野興亡史』 高知県須崎教育社 復刻版 1991年

Ⅲ　調査の成果

1．姫野々城跡の概要

姫野々城跡は，葉山村姫野々，葉山小学校後方の標高193ｍの山上に立地する。津野氏の土居跡が立地する（白雲神社南西下）姫野々集落からの比高差は130ｍを測る。

山頂部には東西23ｍ，南北最大幅8.9ｍを測る平面楕円形を呈した「詰ノ段」にあたる平坦面が存在する。この詰ノ段から比高差３ｍ～５ｍを測る下方には，帯曲輪を呈した「二ノ段」が存在する。この帯曲輪は，西から詰ノ段北下，東下を周り，詰ノ段南下まで延び，西側から螺旋状に高くなっている。二ノ段南及び二ノ段西は，それぞれ最大幅11.2ｍ，16.5ｍを測り，帯曲輪の中でも広くなっている。二ノ段南の西南端からは幅2.5ｍほどの通路が西下に延びており，二ノ段西に通じている。詰ノ段及び二ノ段には土塁等の遺構はみられない。詰ノ段斜面及び二ノ段斜面は急峻な切岸であり，部分的に土止めの石積みに使われていたような石材がみられる。二ノ段の７～10ｍ下には畝状竪堀群があり南東斜面には６本，北斜面は９本，南西斜面に５本みられ，合計20本の畝状竪堀で主郭をとり囲むように放射状に構築している。また，詰ノ段・二ノ段の主郭を中心に東，西，南に尾根が続いており，この尾根にはそれぞれ堀切が連続して構築されている。主郭から東に延びる尾根には鞍部を削り取った４本の堀切があり，それぞれ竪堀を斜面に延ばして連結させている。この４本の堀切の東側には標高189ｍを測る尾根上に平坦面が存在する。「東本城」と呼ばれるこの平坦面は東西21ｍ，南北最大幅14ｍを測り，平面が三角形状を呈している。この曲輪内には，いくつかの転石がみられるが土塁等の遺構は存在しない。曲輪の斜面は急崖であり，５ｍ下には５本の竪堀が放射状に配されている。主郭から西方に延びる尾根上には，４本の堀切がみられる。また，この尾根の基端部，二ノ段西直下には，横堀＋竪堀で構成されるＵ字型を呈した堀が存在する。さらに，南に延びる尾根には大小５本の堀切があり中でも堀切３・４は姫野々城跡の中で最大の堀切である。堀切３は最大幅5.1ｍ，底部幅1.8ｍ，深さ2.5ｍを測り，堀切４は最大幅6.9ｍ，底部幅1.3ｍ，深さ2.6ｍを測る。堀切３と堀切４の間は2.2ｍで，堀切１・２同様，２条の堀切が連続して構築されている。堀切３と堀切２の間には，南北22ｍ，東西最大

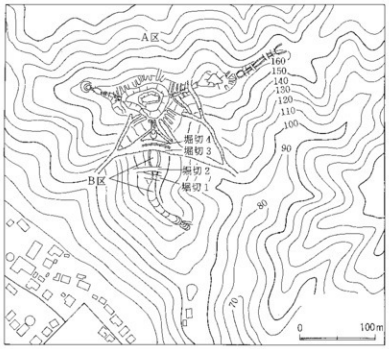


Fig. 5　姫野々城跡地形図

幅11mの平場がある。この平場を挟み堀切1・2が配されている。堀切1は，最大幅6.8m，底部幅2.2m，深さ（第2堀切側）2.2m，（南側）1.3mを測る。南に延びる尾根は堀切1を過ぎると東方にカーブしながら緩やかに下降する。さらに，堀切1から90mほど南東に延びた所で，地形は急

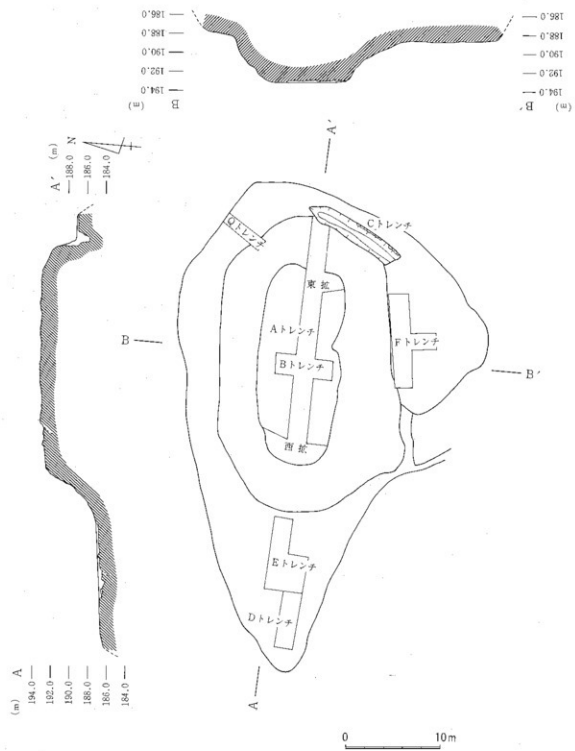


Fig. 6　A区（主郭部分）地形図・トレンチ設定図

幅11mの平場がある。この平場を挟み堀切1・2が配されている。堀切1は，最大幅6.8m，底部幅2.2m，深さ（第2堀切側）2.2m，（南側）1.3mを測る。南に延びる尾根は堀切1を過ぎると東方にカーブしながら緩やかに下降する。さらに，堀切1から90mほど南東に延びた所で，地形は急

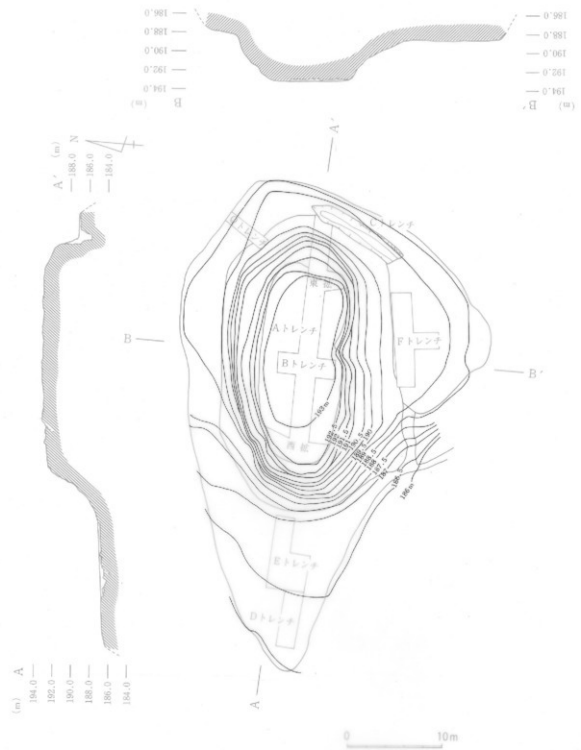


Fig. 6　A区（主郭部分）地形図・トレンチ設定図

崖になり，標高140mを測る南東斜面に竪堀が配されている。標高140mから標高100mを測る白雲神社が鎮座する平坦面までの尾根は急峻である。

2．調査方法

今回の調査は，事前の現地踏査から入り城跡の縄張りの確認を行い，主に公園整備計画予定ルート部分である主郭部分及び丘陵南尾根部の地形測量から実施した。当初，城跡の立地する丘陵は雑木，自然林等が生い茂り調査は困難を極めた。このため，測量及び調査区設定等の際に最低限の雑木等の伐採作業も随時行った。測量基準点には，春日山三角点の標高153.540mを使用し，姫野々城跡詰ノ段に基準点（T－1）を設置した。調査区設定にあたっては，詰ノ段・二ノ段にあたる主郭部分を中心に，地形にあわせて試掘トレンチを設定し，丘陵南尾根部に存在する堀切及び平場にも試掘トレンチを設定した。詰ノ段に設定したトレンチは，曲輪の地形にあわせてA・Bトレンチを十文字に設定し，二ノ段には，C・D・E・F・Qの5箇所任意に設定した。また，丘陵南尾根部には，第1堀切から第4堀切にかけての堀切及び曲輪にG～Pの合計10ケ所，トレンチを任意に設定し調査を行った。また，遺構等を検出したトレンチについては，随時トレンチの拡張，及び遺構の掘り下げを行った。発掘作業は，全て人力により行い，調査終了後は，埋め戻しを行い現況に復した。発掘調査面積は，200m²である。

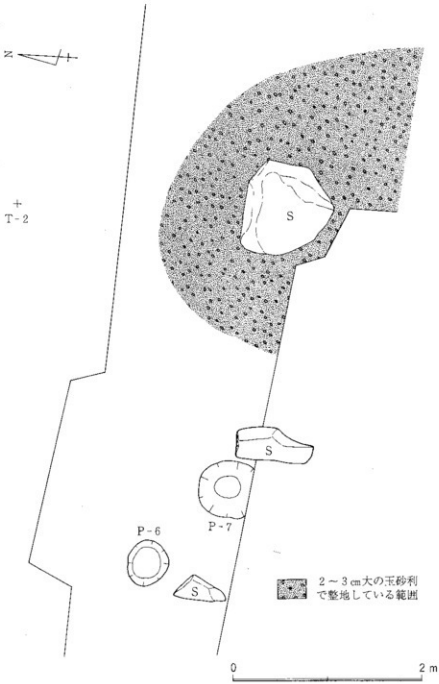


Fig. 7　Aトレンチ東拡張区

3．各トレンチの概要

1）A区（主郭部分）

Aトレンチ

詰ノ段に東西に設定した2×18mのトレンチである。基本層序は現表土の褐色土のみであり，現表土下10cmで地山の岩盤がみられる。現地表面の標高は，193.90mを測る。トレンチの中央やや東よりで，直径56cm，深さ20cm前後を測る岩盤を掘り込んだPitを2個検出した。しかし，植物の木根等で地山の岩盤が攪乱されており，プランとしてはやや不明確である。また，トレンチ東寄りの箇所で直径が1m前後を測る割り石が露頭しておりその部分を中心に拡張した。その結果，石の周辺は直径3～4cm大の玉砂利を敷き詰めており，その範囲は詰ノ段南東斜面にまで至る。このAトレンチ東部分における出土遺物は，表土層より，青磁・染付・備前焼の甕片・土師質土器等が出土した。特に，今回出土した染付については全体量の62％がAトレンチ東拡張区で出土している。地山は詰ノ段中央部から西へ8m延びた所で切れており，そこから詰ノ段西端に至るまでの範囲（18m²）は，明褐色土で整地されており曲輪の拡張をしている部分と考えられる。整地面は表土下約30cmで確認され，Pit 5個，礎石として使われていたものと考えられる直径40cm前後の扁平な円礫を6個検出した。検出面は，ほぼ，フラットであり標高193.544mを測る。また，礎石下の整地層中には，土師質土器片を包含しており，このAトレンチ西拡張区においては，土師

Fig. 8　Aトレンチ西拡張区

質土器の皿・杯がまとまって出土している。

Bトレンチ

詰ノ段に南北に設定した2×6mのトレンチである。Aトレンチ同様，表土下10cm前後で地山の岩盤が認められる。地山の岩盤は植物の木根等による攪乱を受けている。遺構等は検出されなかった。

また，Bトレンチ南延長上の詰ノ段南斜面部も併せて精査を行ったが，表土層を除去すると地山の岩盤が検出され，表土層から土師質土器の細片が僅かに出土したのみであった。斜面は切岸になっており詰ノ段南と二ノ段との比高差は4mを測る。

Cトレンチ

二ノ段，腰曲輪の東部分に設定した2×10mトレンチである。当初，腰曲輪東部分の平坦面Aトレンチ東延長上に2×2mのトレンチを設定し発掘を開始した。表土層40cm下，暗褐色土（第Ⅲ層）中から遺物が出土し始めサブトレンチで調査したところ，第Ⅲ層下，標高188.46mで黒褐色土（第Ⅳ層）を確認しその層中から多量の土師質土器が出土した。さらに，下まで掘り下げたところ，第Ⅳ層下には炭化物及び，土師質土器を包含する黒色土が堆積しており，最終的には，地山の岩盤を掘り込んだ堀状地形を呈していることが判明した。この堀状地形は，断面で確認したところ南方に続いているものと考えられるため，トレンチを南に拡長し遺構検出に併せて調査を進めた。その結果，全長10.8m，上端幅1.8～2.4m，底幅50～60cm，深さ1.14～1.42mを測る平面三日月状を呈した堀であることが確認された。B－B′とC－C′間のⅢ層中には，遺物と共に人頭大の円礫が多量に検出された。さらに，堀の北端より3.40mの所から，南端に至るまで直径30～50cm大の自然石を堀状遺構の西側面に積み上げている。石材は当城跡の立地する丘陵でみられる砂岩質の割り石である。根石にあたる石材は長軸50cm大の比較的大きな石材を使用しており，石材間の間に根石上第2石目を置いている。間石は10cm前後の石を石材間に詰めている。石積みは部分的に切れており，全長1.40m前後のものと3.10mを測るものがあり，高さも55～90cmと疎らである。堀底の底面レベルはA－A′で標高187.45m，C－C′で187.63mを測り，堀の北端より南端の方が18cmほど低くなっている。出土遺物は，土師質土器の皿・小皿・杯・耳皿等が第Ⅲ・Ⅳ層中より一括して出土しており，他には瓦質土器の羽釜（河内産）・備前焼の摺り鉢等の出土も見られる。

A－A′バンクセクション

石積み検出状況

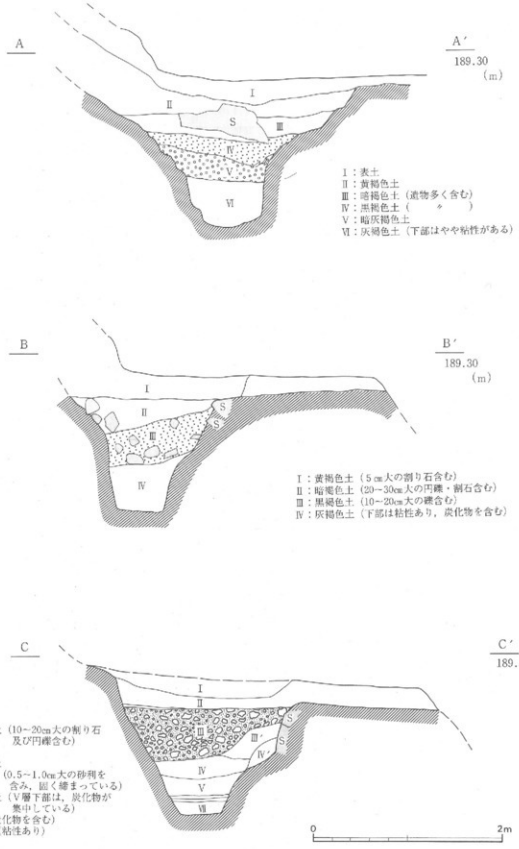


Fig. 10　Cトレンチ堀状遺構バンクセクション図

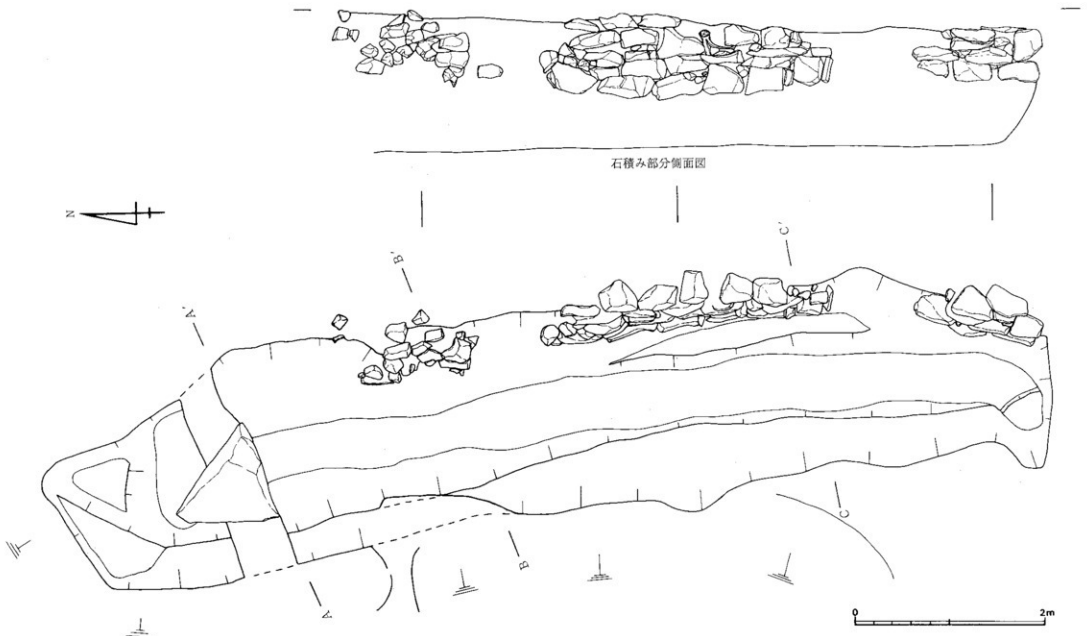
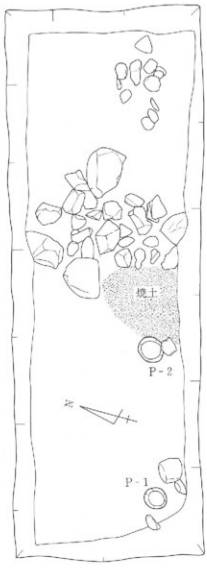


Fig. 9　Cトレンチ堀状遺構平面図，石積み側面図



Dトレンチ

二ノ段，腰曲輪の西端部に設定した2×6ｍのトレンチである。この部分の現地表面の標高は，186.60ｍを測る。層序は，表土層下に第Ⅱ層である明褐色土があり，表土下60㎝で遺物包含層である暗褐色土が認められる。土師質土器の出土とともに，直径10㎝～人頭大の円礫が包含層中より多量に出土する。包含層直下で，赤褐色を呈した焼土がトレンチ西半部で検出したが，炭化物は認められない。この焼土層は，標高185.70ｍで検出されるが，検出面直上で土師質土器の皿・杯等が一括して出土する。地山である岩盤は，西に向って急傾斜しており，地山と焼土層の間には瓦礫層があり，5～10㎝大の瓦礫で整地を行っているものと考えられる。この瓦礫層中からは，白磁・瀬戸天目・土師質土器等が出土した。

Eトレンチ

Dトレンチの東側に設定した2×8ｍのトレンチである。トレンチ東側は，表土層下10㎝で地山の岩盤である。地山はトレンチ中央部で西に向って落ち込んでおり，地山上には，層厚50㎝前後で暗褐色土が認められる。この暗褐色土中からは，土師質土器の皿・杯等の完形が多量に検出され，さらに，礎石と考えられる直径45～50㎝前後の扁平な円礫が検出された。このため，トレンチを一部南に幅2ｍ拡張し礎石の規模

Fig. 11　Dトレンチ平面図，南壁セクション図

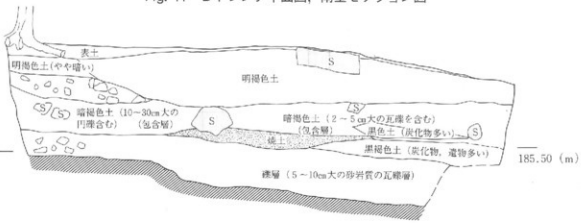


Fig. 12　Eトレンチ平面図，断面図

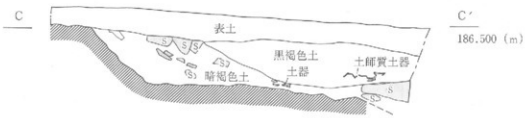


Fig. 13　Eトレンチバンクセクション図

を確認するため，検出作業を行った。その結果，地山の落ち込むラインは南東方向に延びており，このラインに沿うように礎石が2個確認された。さらに，トレンチ西南隅においても，直径50㎝大の扁平な円礫を確認することができた。礎石のプラン及び全体的な規模は把握しきれていないが，2間×2間以上の建物跡になると考えられる。また，立地的にみて，この腰曲輪西部分は春日山及び鶴松森など西方への眺望が開けており，物見櫓の性格も考えられる。礎石検出レベルは標高186.06ｍを測り，Dトレンチ検出の焼土層レベルより，約30㎝ほど高いがこの面が第一次面として存在するものと考えられる。また，礎石検出面において，土師質土器の皿・杯の完形が一括集中して出土している。

Fトレンチ

二ノ段の南部，腰曲輪状平坦面が三角状に拡がっている部分にT字型に設定した2×8ｍ，1.5×2ｍのトレンチである。現地表面の標高は，189.30ｍ前後を測る。この腰曲輪南部分は，東南方向への眺望が開けている。当初，この平坦面には，礎石に使われていたと思われる扁平な円礫及び，割り石が地表面に転がっていた。表土層を掘削すると8～10㎝下は地山の岩盤であり，地山直上で礎石と考えられる円礫及び割り石が検出される。地山は，植物，木根等により攪乱が著しく，柱穴及びPit等は検出されなかった。礎石の並び，規模等は不明であるが建物跡の性格が考えられる。遺物は，表土層より土師質土器が若干量出土しているが，いずれも細片で磨耗が著しく詳細は不明である。

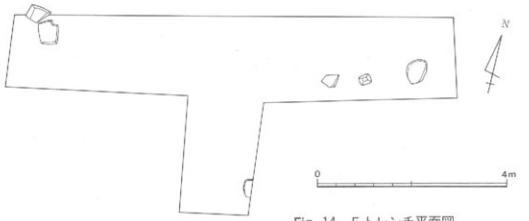


Fig. 14　Fトレンチ平面図

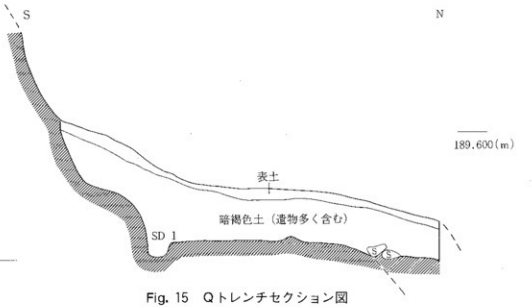


Fig. 15　Qトレンチセクション図

Qトレンチ

二ノ段，腰曲輪北部分を断ち割るように設定した1×5mのトレンチである。腰曲輪の幅は4.5m前後を測り，標高は西から東に向って高くなっている。また，Qトレンチ周辺では，地表面より染付が表採されている。表土下は層厚40～50cm前後を測る礫混じりの暗褐色土があり，土師質土器片・青磁（Fig. 25・80）等の出土が見られた。地山の岩盤は，現地表面下55cm前後，標高188.40mで検出され，ほぼフラットに削平されている。詰ノ段直下の箇所では，岩盤を掘り込んだ幅25cm，深さ15cm前後を測る溝状の遺構を検出している。

2）B区（丘陵南尾根部）

B区は，公園整備で遊歩道設置ルートの丘陵南尾根部に設定した調査区である。今回の調査では城跡の縄張りの中で最大規模である二重の連続堀切3・4を含め，堀切1・2との間に存在する平場及び，堀切1・2の南に存在する平場を中心にトレンチを設定し，各縄張りについて堀切1・2・3・4，平場1・2と便宜的に呼称することとし遺構・遺物の分布密度を把握するための試掘調査を実施した。平場2には，堀切1に対しての土塁状の高まりが南北に3mほど延びている。B区は，平場1にG（2×6m）・H（2×4m）トレンチ，堀切4にI・J（2×2m）トレンチ，堀切3にK・L（2×2m）トレンチ，平場2にM・N（2×4m）トレンチ，堀切2にOトレンチ（2.5×4.5m），堀切1にPトレンチ（2×2m）の合計10ケ所（67.25㎡）を設定した。平場1・2に設定したトレンチからは若干の遺物の出土が見られたが遺構は検出されなかった。堀切3・4に設定したI～Lからは，遺構・遺物とも検出されなかった。堀切3・4は，2～4cm大の瓦礫が層厚50～60cm堆積しており，その下は岩盤である。堀切3・4の堀底は，フラットであり，堀切3は堀肩部から堀底底面までの比高差は3.10mを測る。土橋等は認められない。堀切1・2に設定したO・Pトレンチでは，Oトレンチにおいて，集石遺構が確認され，若干の遺物も出土したが，Pトレンチでは遺構・遺物の出土はなかった。ここでは，集石遺構が確認されたOトレンチについてその概要を述べる。

Oトレンチ

堀切２の中央部に設定した２×２ｍのトレンチである。表土直下（15㎝下）で，20～30㎝大の角礫が集中して検出され，堀切の西方へ可能な限り拡張を行った。その結果，集石は堀切中央部でしか認められず，西方には拡がらない。集石の一部にサブトレンチを設定し，下層の確認を行ったが集石の下，堀切北側底部に固く締まった黄色土が認められる。この固く締まった黄色土は，堀切西方下へ幅70㎝前後で続いており，さらに，平場１の南西斜面に存在する犬走り状の通路に延びている。また，南側底部には黒色土が確認され，この層中より，土師質土器の細片・瓦質土器（風炉の一部であると思われる）等が出土した。遺物は，主に黒色土中に多く含まれ，黄色土中には土師質土器の細片が僅少見られる。堀切の断面で観察すると，堀切南肩部と平場１側である北肩部では，南の方が１ｍほど低くなっており，堀切南側底部で確認された黒色土は，堀切改修の際に南側肩部の土で堀切を埋めているものと思われる。また，集石は黄色土で整地された上面にあり，堀切を改修した際に築かれたものと考えられる。堀切２は，上端幅5.8ｍ，底部幅2.7ｍ，堀切中央部での深さ2.2ｍを測り，堀の断面形は箱型を呈している。

B区（平場１）全景（北より）

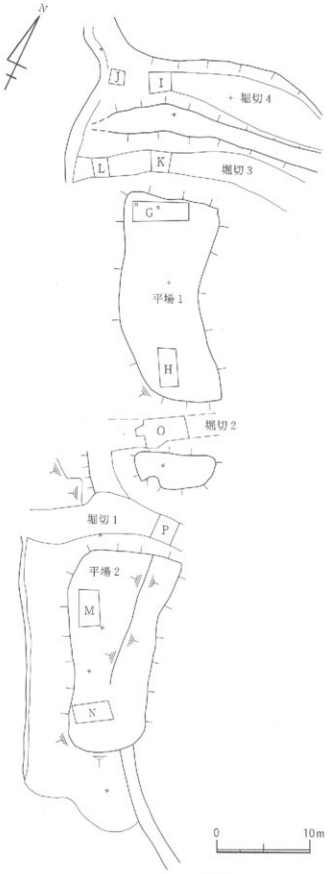


Fig. 16　B区トレンチ位置図

Oトレンチ集石検出状況（西より）

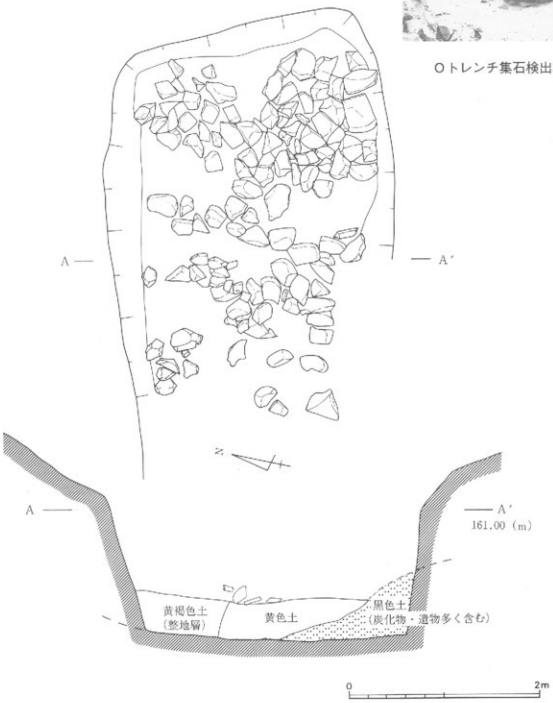


Fig. 17　Oトレンチ平面図，断面図

Ⅳ　出土遺物

今回の調査で出土した遺物の総点数は，細片も含めて10,192点であり，その内訳は土師質土器・瓦質土器・国産陶器（備前焼）・輸入陶磁器（青磁・白磁・染付）・鉄製品・スラグ等である。中でも土師質土器の量が細片も含め9,909点と最も多く，占める割合は土器総点数の97％を占めている。出土地点を見れば，土師質土器についてはＡ区の全てのトレンチから出土しており，中でもＣトレンチから，ほぼ完形の形で一括廃棄された出土や，Ｅトレンチの曲輪拡張部での一括資料が得られている。器種構成としては，杯・皿・小皿等が認められる。瓦質土器は，煮沸具の羽釜を中心に32点が出土している。国産陶器は，備前焼を中心に96点が出土しており，器種構成は貯蔵・調理具である甕・擂鉢が認められる。輸入陶磁器では，青磁64点，青白磁３点，白磁６点，染付82点の総計155点が出土しており国産陶器に比べその占める割合は多い。出土地点を見れば，染付が表土層からの出土ではあるが，詰ノ段東部分及び腰曲輪北部において集中して出土している。

ここでは，今回出土した遺物について種類・器種ごとに分類し，図示した遺物を中心に概要をまとめることにしたい。なお，法量・色調・出土地点についての詳細は観察表を参照されたい。

１）土師質土器

土師質土器は，小皿・皿・杯の供膳具が中心に出土している。今回，出土した供膳具の土師質土器は，皿の一部を除き，すべてロクロ成形で底部外面に回転糸切り痕が施される。皿の中では，微量ではあるが，白色を呈した手づくねの皿もみられる。

ここでは供膳具の小皿・皿・杯について，法量・形態等の特徴から分類を行った。今回の分類の基準は器高で大きく分類し，口径と底径の比率（底径指数）を主に用い，分類外の製品については個々の特徴を説明していく。

小皿（Fig.18　1～26）

小皿は器高で大きく分類し，口径・底径指数等で細分類を以下のとおり行った。

Ａ－１類（１～６）

器高1.0～1.5㎝代で，底径指数が60％代を示すものを抽出した。底部から口縁にかけての形態は１～４のように直線的に外上方に立ち上がるタイプと，５・６のように内湾気味に立ち上がるタイプが存在する。４は灯明皿である。

Ａ－２類（７～11）

Ａ－１類に比べ，器高が1.6～2.0㎝代とやや高いものである。

Ｂ－１類（12～16）

底径指数が80％以上で，口縁が短く立ち上がるタイプのものである。13・16は，やや大振りで，口縁6.9㎝，底径5.6㎝を測る。

Ｂ－２類（17～21）

口径が6.0～6.8㎝を測り，底径指数が70～77％代でB－1類に比べ口縁がやや外反するタイプである。20は灯明皿である。

C類（22～26）

底径指数が90％以上で，口縁が直立気味に短く立ち上がるタイプである。

27・28は耳皿である。形態・法量からみて小皿A－2類に属するものと考えられる。

皿（Fig.18　29～32，Fig.19　33～46）

皿は，杯と明瞭に差が認められないものも存在する。皿と杯は，器高指数で大きく分類した。杯は器高指数が30％以上にその指数がきており，皿は18～29％代を示すものである。皿は，ロクロ成形のもの（A類）と手づくね成形のもの（B類）と大きく二つに分けられる。量的にはロクロ成形のものが圧倒的に多く，手づくね成形の製品は土師質土器全体の出土量の１％にも満たない。

皿A類　ロクロ成形で底径が5.6㎝以上を測るものである。

A－1類（29～32）

底径が5.6～6.6㎝で，器高指数が27～29％代を示すものである。A類の中でもやや器高が高く形態的には杯と明瞭に差位が認められない。

A－2類（33～35）

底径が7.3㎝前後を測りA－1類に比べてやや広く，底径指数が56％以上を示すものである。

A－3類（36・37）

口径が13㎝以上と大きく，器高指数が18％代を示すものである。

A－4類（38～40）

他のA類に比べ胎土・色調に差が認められる。底部から外上方に立ち上がり，口縁端部は丸味を帯びる。器高指数は28％前後を示す。

皿B類　手づくねの製品である。胎土はやや軟質で，色調は灰白色を呈する。口縁部の形態によって大きく分けた。

B－1類（41～43）

B－1類は器高が３㎝前後あり，口縁部は強いヨコナデのため外反する。

B－2類

B－2類は器高が浅く，口縁部を水平に引き出した形態を呈する。

杯（Fig.20　47～63）

杯は，法量・底径指数によって大きく分類し，形態によって細分類した。杯B類（56～58）については皿A－1類と明瞭に差位が認められないが底径指数が50％代後半を示すものでここでは杯として説明する。

杯A類（47～55）

口径が11cm以上を測り，底径指数が48～53％代を占め口径と底径の比率が２：１の製品である。53は，底部に直径2.5cm大の楕円形を呈した焼成後穿孔が認められる。

杯Ｂ類（56～58）

杯Ａ類に比べ底径が6.1～6.4cmとやや大きく，底径指数も50％後半代を示すものである。

杯Ｃ類（59～61）

口径が11cm以下で，器高は４cm以上を測る。杯Ａ・Ｂ類に比べ底部から口縁にかけての立ち上がりがやや直立気味であり，形態的にみて皿と明瞭に区別できる。

杯Ｄ類（62・63）

底径が５cm以下で，口径が11.5cm以上あり，底径指数が40％前半代を示すものである。形態的には皿に類似する。

２）**瓦質土器**（Fig.21　64～69，Fig.22　74）

煮沸具である羽釜が中心に出土している。また，調理具である摺り鉢も１点認められる。羽釜（64～69）は，口縁部の形態により内傾するものをＡ類，直立するものをＢ類と大きく二つに分類し，鍔の形態及び器壁の厚さ等により細分類した。今回出土した羽釜は，全てＣトレンチの掘状遺構（第Ⅲ・Ⅳ層）から出土したものである。

Ａ－１類

口縁部は内傾し，鍔先端部が上方に屈折するものである。64は寸胴な胴部に，やや内傾する口縁を持ち，口縁端部及び，鍔端部が面を持つ。胴部外面には横方向のヘラ削りが認められる。

Ａ－２類

寸胴な胴部に内傾する口縁を持ち，鍔は，ほぼ水平に伸びる。65は，口縁端部及び鍔端部が面を持ち，胴部外面は，横方向のヘラ削り，内面は横方向を基調とするハケ調整を施す。66の口縁端部は面を持ち，鍔先端部は丸味をもって終わる。

Ｂ－１類

口縁部が，ほぼ直立し，鍔は，ほぼ水平に伸びる。67は，胴部外面に横方向のヘラ削り，内面には横方向を基調とするハケ調整を施す。68は，口縁部に炭素を吸着しておらず，鍔先端部は，やや尖り気味に丸く納める。

Ｂ－２類

口唇部が外傾する面をなす。69は，口縁部に炭素を吸着しておらず，胴部上半の器壁は分厚い。

３）**国産陶器**（Fig.22　70～73，75・76）

国産陶器の中では備前焼がほとんどを占め，調理具の擂鉢，貯蔵具の甕が出土している。

擂鉢（70～73）

70は，体部が外上方に立ち上がり，口縁部が上方に拡張され，内傾する面を持つ。内面には７本単位の条線が認められる。条線は，口縁直下から始まる。71は，底部から外上方に立ち上がり，体

部中央部でやや外反し，さらに外上方に伸びる。口縁部は上下に拡張され内傾する面を持ち，片口の形態を呈する。内面には，7本単位の条線が認められ，条線は口縁直下から始まる。72は，底部片であり，条線8本単位の条線が認められる。73の口縁部は上方に拡張され，端部は尖り気味に納める。内面には，7本単位の条線が認められる。

4）輸入陶磁器（Fig.23　77～96，Fig.24　97～101）

青磁（64点）・青白磁（3点）・白磁（6点）・染付（82点）の合計155点が出土している。出土した青磁は，碗・皿・盤の破片が中心であり，他に香炉や外面に唐草文を施した青白磁の梅瓶の破片（87）が出土している。白磁では，皿・碗を中心に出土が見られる。染付は，ゴケ底タイプの皿・高台付き皿・小鉢等が出土している。

出土地点としては，詰ノ段Aトレンチを中心に，二ノ段に設定した各トレンチからの出土もみられた。特に染付については，詰ノ段の東部分から二ノ段の北部分にかけて集中して出土している。

以下に，今回，図示した遺物を中心に概要を述べる。

青磁（77～86）

77～80は碗であり，81・83・86は皿，82～85は盤である。碗77は，線描蓮弁文を持つ。ヘラ先による線描の蓮弁と，山形の剣頭との単位に，やや乱れが生じている。碗79は，外面に界線がみられ，色調は全体的に透明感の強いオリーブ灰色を呈する。碗80は，体部外面に雷文帯を持つ碗であるが，かなり崩れており，内面には草花状の文様が見られる。皿81の色調は青白色を呈し，体部外面には片切彫あるいは，丸彫で蓮弁が施される。皿86は，高台を持ち，口縁部は外反する。釉は，畳付を越えて，高台内面まで施釉され，外底は露胎のままである。内面見込みには，印花文が施される。盤82は，鎬蓮弁文が施され，口縁は「く」の字状に外反する。蓮弁は，先端が尖り気味で，鎬はシャープである。83は稜花皿であり，体部内面には深い丸彫の菊花文が施される。84は盤であり，口縁を「く」の字状に折り曲げ，さらに上方に引き上げている。体部内面には深い丸彫の菊花文が施される。85は，盤の底部と思われる。断面四角形の高台を持ち，畳付を越えて高台内面まで施釉されている。外底は露胎のままである。87は青白磁であり，梅瓶の胴部片である。体部外面には唐草文が施され，内面はロクロ目が顕著である。

白磁（88～90）

88は碗の口縁部片であり，内湾気味の体部から口縁は屈折しながら外反する。青味がかった白濁色釉が施され，口縁部内面の屈折部には釉が溜り，界線状を呈している。89は，高台をもつ皿であり，施釉は体部の下端から底部が露胎である。白濁色の釉に貫入が入る。90は，口禿げタイプのものである。体部，口縁部はやや外反しながら立ち上がる。底部は，体部に比べ器壁が厚く，内面見込みはやや盛り上り気味になっている。乳灰白色を呈した釉が内外面ともに施釉されるが口縁端部のみ露胎とする。

染付（91～101）

染付については，小野正敏氏の「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」（『貿易陶磁研究No. 2』日本貿易陶磁研究会）に基づき，以下に記述してゆく。

今回，図示した染付の99・100以外は全て皿である。91・92は端反り皿であり，91の外面には牡丹唐草文が描かれており，口縁部内外面には界線が認められる。92は，端反り皿の底部片であり，高台が付く。内面見込みには，玉取獅子が描かれる。91と92はセット関係が考えられ，小野正敏氏の分類での皿B_1群Ⅶに属するものと考えられる。93・94は端反り皿であり，皿B_1群Ⅷに属するものである。体部外面には，密に渦状に装飾化された唐草文が，内面にはアラベスク風の文様が描かれている。95～98は碁笥底を呈する皿であり，皿C群に属するものである。いずれも体部外面には密に渦状に装飾化された唐草文，内面にはアラベスク文様が描かれている。99・100は器形は不明だが，体部の立ち上がりからみて鉢と思われる。高台付の底部から直立気味に立ち上がり，口縁部はやや外反する。器壁は薄く，外面には繊細な筆致で草花風の文様が描かれ，底部内面には二重の界線が認められる。101は，皿B_2群の端反り皿である。高台畳付け及び高台内面は釉を削り取っている。外面は無文で，内底全体に捻花風の便化した牡丹文が描かれている。釉及び呉須は青味が強い。

5）その他，瓦質土器・石製品・鉄製品・古銭（Fig. 24　102～107）

102は，器形は不明であるが瓦質風炉の一部であると思われる。内外面ともに黒色を呈する。端部は水平な面をなし，外面に断面三角形の隆起が短冊状に連なる。103は石硯であるが陸部，海部の一部が欠損している。断面は長方形を呈し，側面は底部より上面にかけて垂直に立ち上がり磨き込まれる。現存部分で，長さ4.8㎝，幅4.1㎝，高さ1.6㎝を測る。104・105は鉄製品である。

104は不明品であるが，形状は板状で厚さが0.2㎝と薄く，端部は断面三角形を呈した隆起が認められる。全長5.2㎝，全幅5.0㎝を測る。105は釘である。全長6.8㎝，厚さ0.5㎝を測る。古銭106・107は，二ノ段Fトレンチからの出土であり，今回図示した2枚が検出されている。106は，北宋銭の紹聖元寶であり，外径24.0㎜，内径19.0㎜，重さ1.9ｇを測る。107は寛永通寶で，外径22.0㎜，内径18.0㎜，重さ1.5ｇを測る。

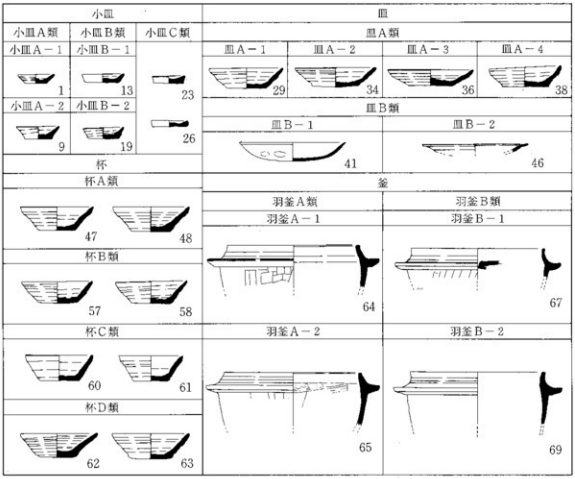


Fig. 18　土師質土器・瓦質土器（羽釜）形態分類図（S：¼）

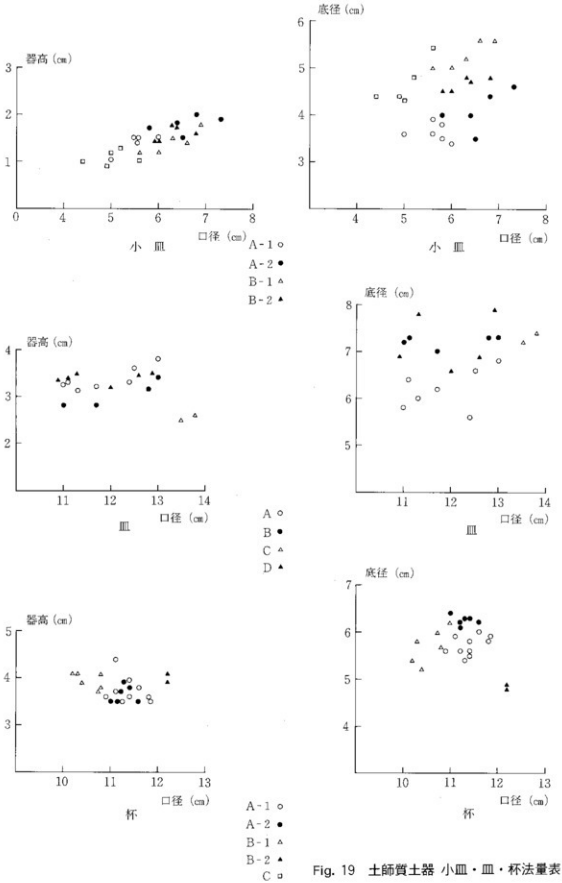


Fig. 19　土師質土器 小皿・皿・杯法量表

出土土器法量表

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外	内(断)	郭	出土TR	層位
1	土師質土器	小 Ⅲ A－1	5.8	1.4	3.5		橙 5YR6/8 〃 6/6		Ⅱ	Eトレンチ	Ⅱ
2	〃	〃	5.6	1.5	3.85		〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
3	〃	〃	6.0	1.5	3.4		橙(一部赤色) 10R5/6 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
4	〃	〃	5.8	1.6	3.8		橙 5YR6/8 〃 6/6		〃	Cトレンチ	Ⅲ
5	〃	〃	5.6	1.5	3.6		にぶい橙 5YR6/4 橙 6/8		〃	Cトレンチ	Ⅲ
6	〃	〃	5.0	1.0	3.6		橙 5YR6/8 にぶい橙 6/4		〃	Cトレンチ	Ⅲ
7	〃	〃 A－2	5.8	1.7	4.0		橙 5YR6/6 〃 6/8		〃	Cトレンチ	Ⅲ
8	〃	〃	6.4	1.8	4.0		橙 5YR6/8 〃 6/6		〃	Cトレンチ	Ⅲ
9	〃	〃	6.8	2.0	4.4		橙(一部赤色) 10R5/6 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
10	〃	〃	6.5	1.6	4.5		〃 〃(一部橙) 7.5YR		〃	Cトレンチ	Ⅲ
11	〃	〃	7.3	1.7	4.6		明赤褐色 2.5YR5/6 にぶい橙 5YR6/4		〃	Eトレンチ	Ⅱ
12	〃	〃 B－1	6.0	1.2	5.0		橙 5YR6/8 〃 6/6		〃	Cトレンチ	Ⅲ
13	〃	〃	6.6	1.4	5.6		にぶい黄橙 10YR7/3 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
14	〃	〃	6.3	1.5	5.2		橙 5YR7/6 〃 7.5YR7/6		〃	Cトレンチ	Ⅲ
15	〃	〃	5.6	1.9	5.0		橙 5YR6/8 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
16	〃	〃	6.9	1.8	5.6		にぶい黄橙 10YR7/4 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
17	〃	〃 B－2	5.8	1.5	4.5		橙 7.5YR6/6 〃 5R6/8		〃	Eトレンチ	Ⅱ
18	〃	〃	6.0	1.5	4.5		橙 5YR6/8 〃 6/6		〃	Cトレンチ	Ⅲ
19	〃	〃	6.4	1.8	4.7		橙 5YR6/8 〃(一部赤色) 10R5/6		〃	Cトレンチ	Ⅲ
20	〃	〃	6.8	1.6	4.8		橙 7.5YR6/6 〃 5YR6/8		〃	Cトレンチ	Ⅲ
21	〃	小 Ⅲ B－2	6.3	1.8	4.6		橙 5YR6/8 〃		Ⅱ	Eトレンチ	Ⅱ
22	〃	〃 C	4.7	1.2	4.3		黄橙 7.5YR7/8 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
23	〃	〃	5.2	1.3	4.8		黄橙 7.5YR7/8 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
24	〃	〃	4.5	1.0	4.4		にぶい橙 7.5YR7/4 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
25	〃	〃	4.9	0.9	4.4		橙 7.5YR7/6 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
26	〃	〃	5.5	1.0	5.5		橙 7.5YR7/6 〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ

出土土器法量表

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外	色調 内(断)	郭	出土TR	層位
27	土師質土器	耳皿	7.0	2.3	3.8		橙 5YR6/8	〃 7.5YR7/6	〃	Cトレンチ	Ⅲ
28	〃	〃	7.8	2.95	2.3		橙 5YR7/8	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
29	〃	皿 A－1	11.7	3.2	6.0		橙 7.5YR7/6	〃 7/8	〃	Eトレンチ	Ⅱ
30	〃	〃	12.0	3.3	5.6		橙 5YR6/8	〃	〃	Eトレンチ	Ⅱ
31	〃	〃	12.4	3.65	6.6		にぶい橙 7.5YR7/4	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
32	〃	〃	13.0	3.8	6.6		橙 5YR6/8	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
33	〃	〃 A－2	11.0	2.8	7.2		橙 5YR6/8	〃	〃	Eトレンチ	Ⅱ
34	〃	〃	12.8	3.15	7.3		橙 5YR6/6	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
35	〃	〃	13.0	3.4	7.3		橙 5YR6/8	〃	Ⅰ	Aトレンチ(西)	Ⅱ
36	〃	〃 A－3	13.5	2.55	7.2		橙 7.5YR7/6	〃	Ⅱ	Cトレンチ	Ⅳ
37	〃	〃	13.8	2.6	7.4		橙 5YR7/6	〃	Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅱ
38	〃	〃 A－4	11.1	3.4	7.3		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	Ⅱ	Eトレンチ	Ⅱ
39	〃	〃	12.0	3.1	6.6		にぶい橙 7.5YR7/4	〃 5YR7/4	〃	Cトレンチ	Ⅲ
40	〃	〃	12.6	3.45	6.9		にぶい橙 7.5YR7/3	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
41	〃	皿 B－1	17.0	3.0	9.0		灰白 10YR8/2	〃	Ⅱ	Eトレンチ	Ⅱ
42	〃	〃	17.6	3.1	8.5		〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
43	〃	〃	18.0	2.0	9.0		〃		〃	Eトレンチ	Ⅱ
44	〃	〃 B－2	20.0	(1.4)	—		〃 浅黄橙 10YR8/3		〃	Dトレンチ	Ⅱ
45	〃	〃	17.0	(1.8)	—		灰白 10YR8/2	〃	〃	Cトレンチ	Ⅳ
46	〃	〃	16.8	(1.3)	—		にぶい黄橙 10YR7/2	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
47	〃	杯 A	11.6	3.8	6.0		橙 5YR6/8	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
48	〃	〃	12.0	4.0	6.0		〃		〃	Cトレンチ	Ⅲ
49	〃	〃	11.2	4.4	6.0		〃		〃	Dトレンチ	Ⅲ
50	〃	〃	10.9	3.6	5.6		橙 7.5YR7/6	〃	〃	Eトレンチ	Ⅱ
51	〃	〃	11.1	3.7	5.4		橙 5YR6/8	〃	〃	Cトレンチ	Ⅲ
52	〃	〃	11.8	3.95	5.9		橙 7.5YR6/6	〃	〃	Eトレンチ	Ⅱ

出土土器法量表

挿図番号	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	高台高	色調 外	色調 内(脚)	郭	出土TR	層位
53	土師質土器	杯 A	11.4	3.6	5.5		橙	5YR6/8	〃	Eトレンチ	Ⅱ
54	〃	〃	11.4	3.6	5.8		橙	5YR6/6	〃	Dトレンチ	Ⅲ
55	〃	〃	11.4	3.6	5.6		橙	7.5YR6/8	〃	Eトレンチ	Ⅱ
56	〃	〃 B	11.0	3.8	6.4		橙	7.5YR7/8 6/6	〃	Cトレンチ	Ⅲ
57	〃	〃	11.2	3.5	6.2		橙	7.5YR7/6	〃	Cトレンチ	Ⅲ
58	〃	〃	11.2	3.5	6.1		橙	5YR7/8	〃	Cトレンチ	Ⅲ
59	〃	〃 C	10.4	4.1	5.8		にぶい橙 橙	7.5YR7/4 7.5YR7/6	〃	Cトレンチ	Ⅲ
60	〃	〃	10.8	4.1	6.2		にぶい橙 橙	7.5YR7/4 5YR6/8	〃	Cトレンチ	Ⅲ
61	〃	杯 C	10.2	4.1	5.4		明赤褐色 〃	2.5YR5/6 5/8	Ⅱ	Cトレンチ	Ⅲ
62	〃	〃 D	11.5	3.9	4.9		橙	5YR6/8	〃	Cトレンチ	Ⅲ
63	〃	〃	12.0	4.1	4.8		にぶい黄橙	10YR7/4	〃	Cトレンチ	Ⅲ
64	瓦質土器	羽釜 A－1	21.2	(6.9)	—		黒色	2.5Y2/1	〃	Cトレンチ	Ⅲ
65	〃	〃 A－2	22.0	(8.6)	—		〃 〃(断面)浅黄色2.5Y7/4		〃	Cトレンチ	Ⅲ
66	〃	〃 A－2	23.0	(5.2)	—		黒色 灰黄褐色	2.5Y2/1 10YR4/2	〃	Cトレンチ	Ⅲ
67	〃	〃 B－1	21.3	(5.0)	—		黒色 〃	2.5Y2/1	〃	Cトレンチ	Ⅲ
68	〃	〃	23.0	(7.3)	—		黄灰色 黒色	2.5Y4/1 2.5Y2/1	〃	Cトレンチ	Ⅲ
69	〃	〃 B－2	21.6	(8.4)	—		黒褐色 黄灰色	2.5Y3/1 2.5Y4/1	〃	Cトレンチ	Ⅲ
70	備前焼	擂鉢	28.8	(9.1)	—		赤褐色 〃	10R4/3 4/4	〃	Cトレンチ	Ⅲ
71	〃	〃	32.1	9.2	13.0		暗赤褐色 暗赤色	7.5R3/3 10R3/6	〃	Cトレンチ	Ⅲ
72	〃	〃	—	(5.1)	18.0		暗赤褐色 暗赤灰色	2.5YR3/2 〃 3/1	Ⅰ	Aトレンチ(西)	Ⅱ
73	〃	〃	32.2	(4.3)	—		暗赤褐色 赤黒色	10R3/2 10R2/1	Ⅱ	Cトレンチ	Ⅲ
74	瓦質土器	〃	15.5	(5.2)	—		黒褐色 灰黄色	2.5Y3/1 2.5Y7/2	Ⅰ	Aトレンチ(西)	Ⅱ
75	備前焼	壺	—	(4.4)	—		赤黒色 暗赤色	10R2/1 10R3/6	Ⅱ	Cトレンチ	Ⅰ
76	〃	〃	—	(9.6)	41.4		暗赤褐色 赤黒色	10R3/3 10R1.7/1	Ⅱ	Dトレンチ	Ⅶ
77	青磁	碗	10.7	(4.6)	—	—	灰オリーブ 〃	7.5Y5/3	Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅰ
78	〃	〃	12.6	(2.6)	—	—	明オリーブ灰 〃	5GY7/1	Ⅱ	Cトレンチ	Ⅱ

出土土器法量表

挿図番号	種別	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	高台高	色調	外内(断)	郭	出土TR	層位
79	青磁	碗	11.0	(5.3)	—	—	灰オリーブ 7.5Y5/3 〃		ⅠⅡ	Aトレンチ(東) Cトレンチ	Ⅰ
80	〃	〃	20.0	(3.8)	—	—	オリーブ灰 10Y6/2 〃		Ⅱ	Qトレンチ	Ⅱ
81	〃	皿	10.9	(2.35)	—	—	明緑灰色 10GY7/1 〃		Ⅱ	Cトレンチ	Ⅲ
82	〃	盤	21.4	(3.0)	—	—	緑灰色 10GY6/1 〃		Ⅰ	Aトレンチ(西)	Ⅱ
83	〃	皿(梅花皿)	20.0	(2.2)	—	—	オリーブ灰色 10Y6/2 〃		Ⅱ	Eトレンチ	Ⅱ
84	〃	盤	29.2	(4.0)	—	—	灰白色 10Y7/2 〃		〃	Cトレンチ	Ⅳ
85	〃	盤	—	(1.9)	7.1	0.7	緑灰色 10GY6/1 〃		〃	Qトレンチ	Ⅰ
86	〃	皿	8.8	2.9	4.8	0.6	オリーブ灰色 10Y6/2 〃		Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅰ
87	青白磁	梅瓶	—	(6.3)	—	—	明緑灰色 10GY8/1 灰白色 5GY8/1		〃	Aトレンチ(西)	Ⅱ
88	白磁	碗	17.8	(3.3)	—	—	明オリーブ灰色 5GY7/1 〃		Ⅱ	Dトレンチ	Ⅱ
89	〃	皿	—	(2.7)	4.8	0.5	灰白色 N8/1 〃		〃	Qトレンチ	Ⅰ
90	〃	〃	11.0	3.0	5.8	—	灰白色 5GY8/1 〃		〃	Dトレンチ	Ⅶ
91	染付	皿 皿B群Ⅶ	12.0	(1.8)	—	—	灰白色 5GY8/1 〃		Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅰ
92	〃	〃 〃	—	(1.95)	8.8	0.65	〃 〃		〃	Aトレンチ(東)	Ⅰ
93	〃	〃 皿B群Ⅷ	12.4	(2.5)	—	—	明青灰色 5B7/1 〃		〃	Aトレンチ(東)	Ⅰ
94	〃	〃 〃	12.8	(2.3)	—	—	〃 〃		〃	Aトレンチ(東)	Ⅰ
95	〃	〃 皿C群	—	(3.25)	6.0	0.6	〃 〃		Ⅱ	Qトレンチ	Ⅰ
96	〃	〃 〃	—	(2.3)	7.6	0.4	〃 10BG7/1 〃		Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅰ
97	〃	〃 〃	—	(1.6)	6.8	0.5	〃 5B7/1 〃		Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅰ
98	〃	〃 〃	—	(1.65)	6.4	0.5	〃 〃		Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅰ
99	〃	杯	10.2	(3.35)	—	—	〃 10BG7/1 〃		Ⅱ	Qトレンチ	Ⅰ
100	〃	〃	—	(3.6)	6.2	—	〃 〃		Ⅱ	Qトレンチ	Ⅰ
101	〃	皿(皿B群)	—	(2.0)	8.4	—	明緑灰色 10GY8/1		Ⅰ	Aトレンチ(東)	Ⅰ

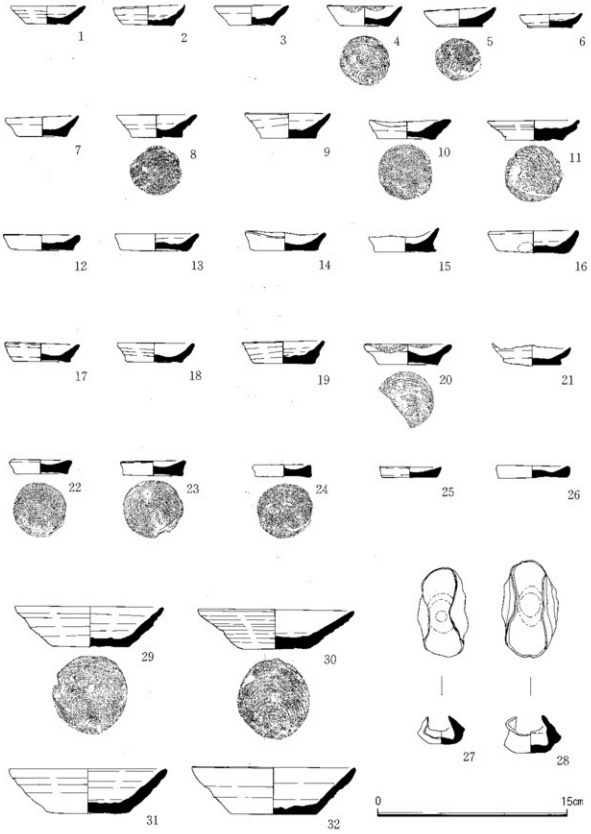


Fig. 20　出土遺物1　土師質土器（小皿・耳皿・皿）

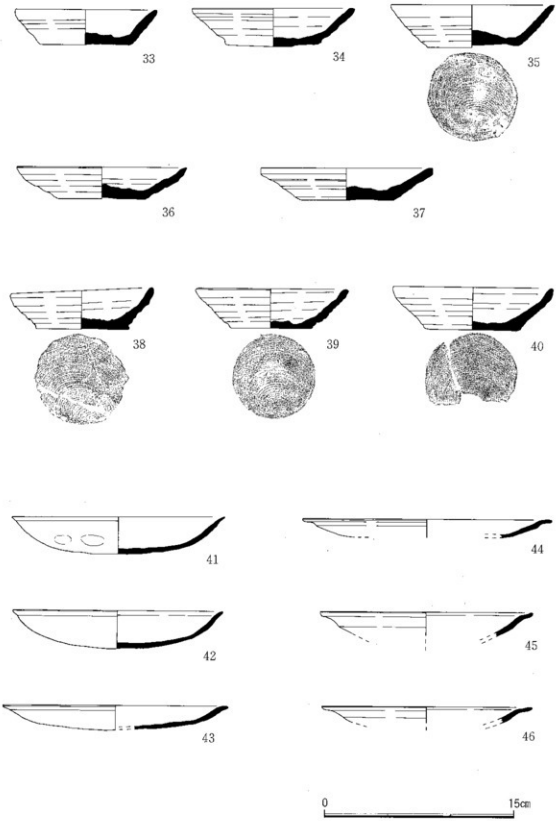


Fig. 21　出土遺物2　土師質土器（皿）

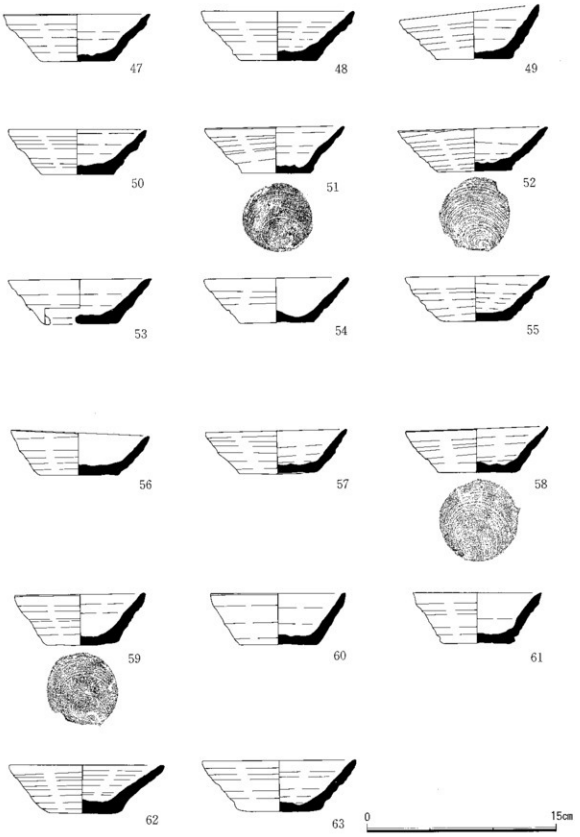


Fig. 22　出土遺物3　土師質土器（杯）

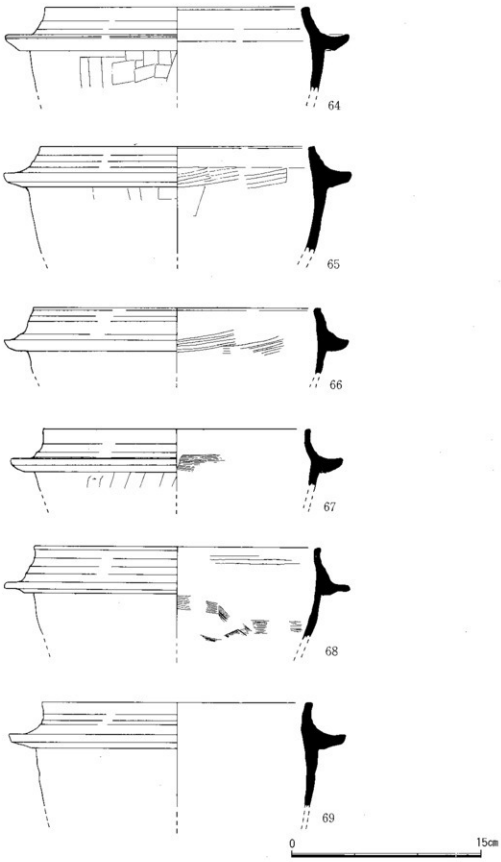


Fig. 23　出土遺物 4　瓦質土器（羽釜）

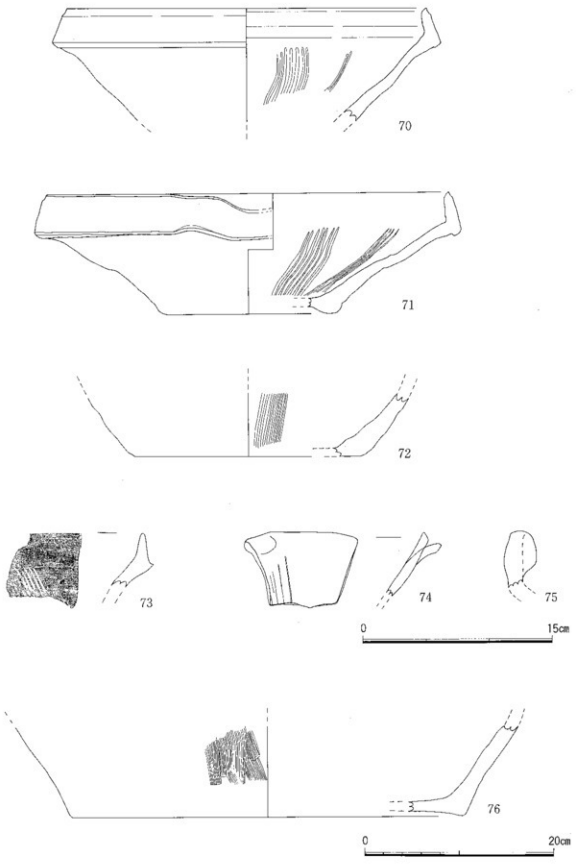


Fig. 24　出土遺物5　備前焼・瓦質土器（No. 74 こね鉢）

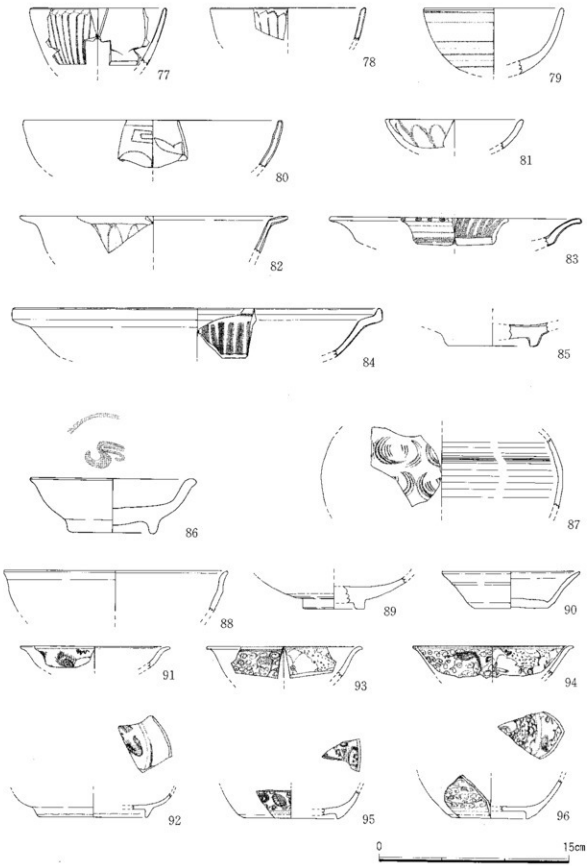


Fig. 25　出土遺物6　青磁・青白磁・染付

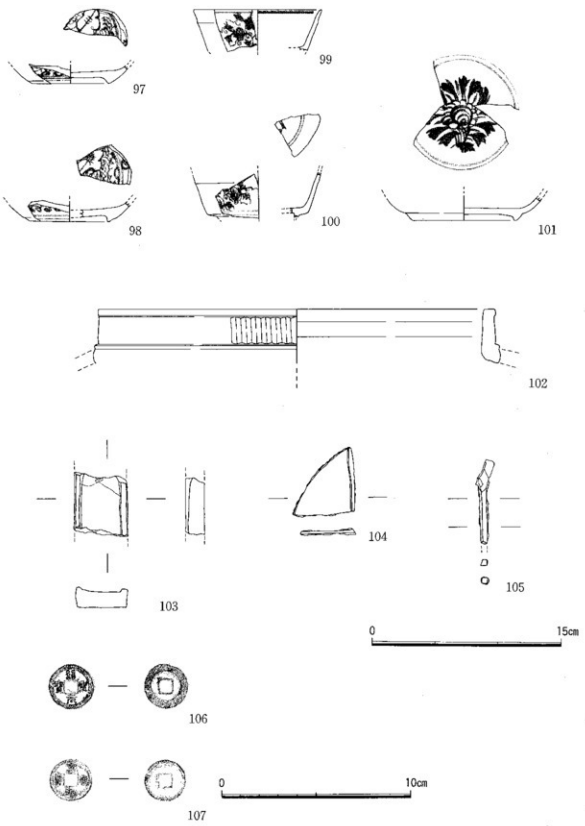


Fig. 26　出土遺物 7　染付・瓦質風炉・石硯・鉄製品・古銭

Ⅴ まとめ

今回の調査は，姫野々城跡の現状把握を目的とし一部発掘調査を交えたものであった。主に，城跡の主郭となる「詰ノ段」，「二ノ段」及び丘陵の南尾根部に存在する平場，堀切について部分的な発掘調査を行うことができ，その概要は把握することができた。また，城郭の調査で欠くことのできない縄張り調査も主要な部分の概略を掴むことができた。

ここでは，今回の調査で確認された姫野々城跡の縄張り，遺構，遺物について若干の考察を行いまとめとしたい。

1．遺　構

姫野々城跡の縄張りからみると，曲輪については，主郭「本城」にあたる「詰ノ段」・「二ノ段」及び，「東本城」の３ヶ所が確認された。各曲輪は東西方向の尾根上に連続しており，詰ノ段・二ノ段と東本城との間は４本の連続堀切によって隔されている。さらに，二ノ段東端から比高差約10ｍの切岸になっており直下には横堀が存在する。これらの堀切及び横堀には全て竪堀が連結しており約20ｍ前後斜面下方にまで落とされているが，地形的にみて竪堀のライン末端から下にかけては山の斜面部は非常に急峻になり地形自体が自然の要害となっている。このため，侵入ルートは，谷部に制約されるため，斜面の谷部に向かって竪堀が集中するように配されている。特に，南東斜面に対しての竪堀の配置は見事であり，２ヶ所存在する谷部を登り詰めると本城及び東本城直下から降るいずれかの竪堀に行き当る様に配されている。当城跡の立地する山の地形からみても南東部が比較的等高線が緩く攻められ易いために南東斜面に対してより強固な縄張り配置をしている様に考えられる。そして本城は尾根の分岐にあたる部分に配置されているが，東本城は本城から東方に派生する尾根上に配されていること，さらに，本城に比べ低標高であり曲輪の規模も小さいことなどから城跡の南東部からの侵入に対する本城の補助的な曲輪であると思われ，平溜り，もしくは南東方向への眺望が開けていることなどから物見櫓が建っていた可能性が考えられる。東本城の東下で確認されている堀切から東についての詳細は不明であるが，起伏を持ちながら尾根はさらに東方に延び「薙ケ森」と称される丘陵の頂部に至るまで曲輪と考えられる平坦面は存在せず，尾根鞍部及び斜面部にも主郭周辺に見られるような空堀等の縄張りは見られない。薙ケ森と称される山頂部についても曲輪と考えられる平坦面は認められない。東方に延びる尾根自体が非常に起伏があり，それに伴う斜面も急峻であり要害をなしており，城域として遮断するのは難しいが人工的な防御機能を持った施設は東本城までであり，城域の東限の要として本城と同時期に東本城は存在していたものと考えられる。

ふたたび詰ノ段・二ノ段の主郭部分の曲輪に目を向けると詰ノ段を螺旋状に取り巻く形で帯曲輪状平坦面の二ノ段が存在する。今回の主郭部分の発掘調査で遺構が検出されたのは，詰ノ段西端部，二ノ段西・東・南部分である。詰ノ段西では，曲輪の拡張が行われており整地面上で Pit が検出されている。この拡張部は二ノ段南と西との段差が生じる部分の延長上から西側であり，南尾根から続く城道状の通路から二ノ段に登り詰めた場所の真上である。この通路は，二ノ段西にそのまま続

いているが途中，東に折れ，さらに南に屈折し二ノ段南との段部斜面に延びている様に見え，その通路状の縁辺には部分的にではあるが石垣状の石積みが確認できる。今回は，発掘調査は行えなかったが，この城道を登り詰めた二ノ段南と西の境界部には虎口構造になっていた可能性が強い。そして，虎口構造をもった時期に詰ノ段の西側部分についての拡張は行われ横矢のような性格を持つ部分に変化したものと考えられる。

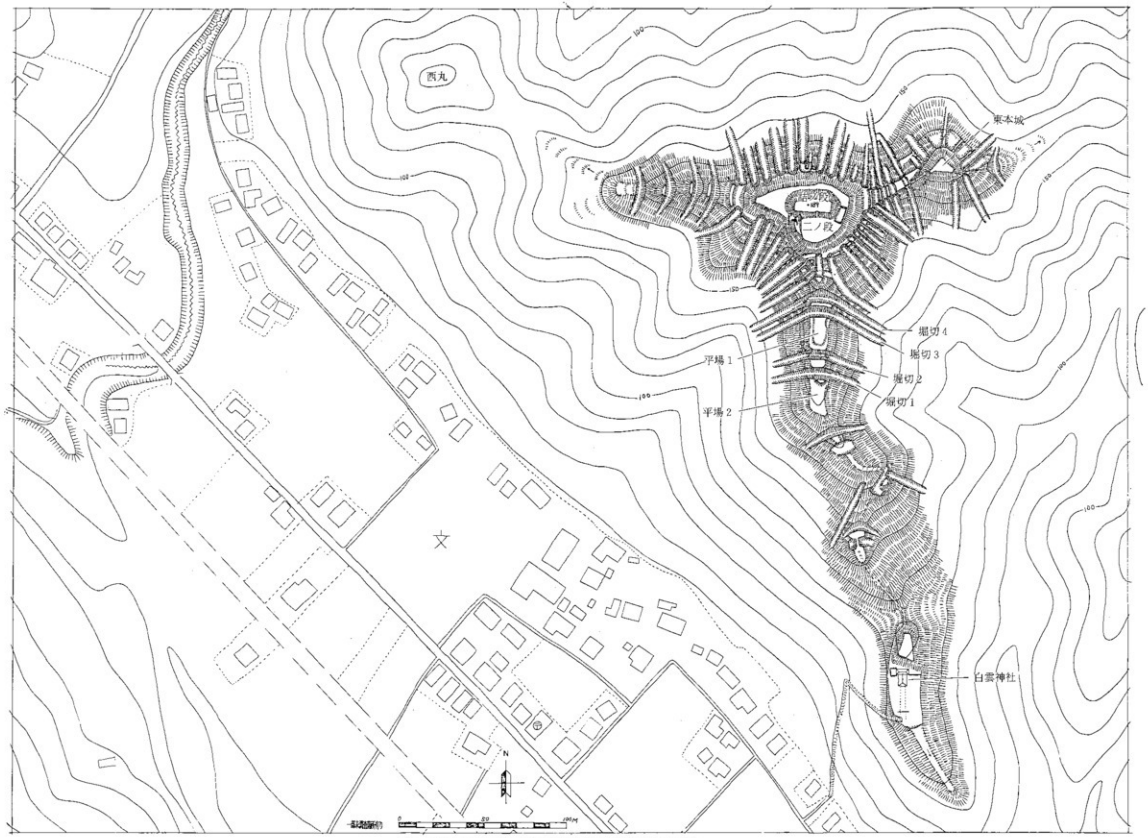
二ノ段西は，二ノ段でも西に大きく突出した曲輪であり西方への眺望が開けており，春日山，本村方面が一望でき，鵜松森まで望むことができる。Eトレンチで検出された礎石遺構はAラインの礎石は西北から南東方向で並んでおり，Bラインの礎石の並びと考え併せると総柱の建物跡になる可能性が強い。おそらく総柱の物見櫓，倉庫的な建物が建っていたと考えられるが，Bラインの1石を除く他の礎石は，地山の岩盤を削り込んだ一段低い面で検出しており構造上の問題点が残る。全体的なプランが把握仕切れていないので詳細は不明であるが，トレンチ外の部分で岩盤上で検出されている礎石と同一レベルで礎石の並びが検出されれば，考えられるのは半地下構造を持つ倉庫的な建物もしくは，Dトレンチで多量に検出されている人頭大の円礫及び，二ノ段西下に存在する竪堀群，南から続く城道等の縄張りからみれば，これらの侵入路に対しての防御機能を持った半地下の兵舎小屋等が想定される。また，出土遺物の中に鉄製品，羽口等が見られ，検出面上に炭化物及び焼土が認められる事から，一定の生産活動が行われていた可能性も考えられる。

二ノ段西から二ノ段東にかけては幅3mほどの帯曲輪になっており，標高が東に向かって高くなっている。Qトレンチの断面で確認すると表土と岩盤との間に50cmほどの盛土で整地された跡が認められ，整地により現状での帯曲輪のように西から東に向かって標高を高くしている。この整地層中より土師質土器片，青磁片（No.80）等が出土しており，その青磁片の形態から15世紀代にこの帯曲輪の改修が行われたものと考えられる。

二ノ段東では，堀状遺構を検出しているが現段階では性格は不明である。類似する遺構は，中土佐町に所在する久礼城跡の詰ノ段で検出されており伝承によると井戸があったとされている場所であるが，集水路等の確認[12]はされていないため性格は不明である。姫野々城跡の堀状遺構も，たしかに堀の底面直上の層は粘性があり，上層の腐食土と思われる黒色土層をみれば岩盤と石積みを併用した天水の溜池施設のような性格も考えられるが今回の調査では集水路等は確認できていない。遺構の位置からすれば主郭の東側に位置し，前述した東本城および城跡東南部分の縄張りと考え併せればこれらの方向に対する防御施設，塹壕的な要素も考えられる。そして堀の埋土から出土した遺物からみれば，部分的に残存している石積みは当初，15世紀中頃～後半において塹壕の縁辺部に存在していたであろう土塁を，後に石垣で囲み石塁状の強固なものにしていた可能性が考えられ，さらに，その石塁状の盛土で塹壕の穴を埋め，現状の帯曲輪状平坦面に改変されたものと考えられる。

堀状遺構から南は，二ノ段でも曲輪が南に広く突出している部分であり，Fトレンチから礎石遺構を検出した。この二ノ段南は南方さらには，南東方向の眺望が開けており，新荘川下流，新土居の古城（新土居城）まで一望できる。Fトレンチで検出した礎石遺構も全体のプランが把握しきれていないが，立地的に見れば主郭部分から南に対しての物見櫓が建っていた可能性が考えられる。

以上，主郭部分を発掘調査によって確認された遺構を主に推察してみたが，次に下方の縄張りに



土居 姫野々城 調査作図：94. 8. 25：池田 誠 高知県高岡郡窪川町姫野々本城

Fig. 27　姫野々城跡縄張り図

ついて見てみたい。主郭部分下方の斜面には，放射状に畝状竪堀が存在する。これらの竪堀群は前述したように谷部に向かって末端が集中するように落としており，東尾根の始点に見られるような横堀が南尾根，西尾根の始点に見られる。特に，西尾根の始点にある横堀は，竪堀と連結しておりU字型を呈する。西尾根の始点からさらに西方の鞍部には４本の連続した堀切があり，西丸と呼ばれる尾根端部にかけて地形は急傾斜している。

南尾根に目を向けると，堀切３・４はこの城で他に類を見ない見事な二重堀切であり，その規模も最大で，南に延びる尾根を切断している。堀切３・４の南には，小規模な平場１を挟み二重堀切１・２がある。堀切２に設定したＯトレンチで検出された集石遺構は明らかに堀切の改修を行っており，平場１南斜面の犬走りとの関係からみれば堀切改修後，通路状の性格を持つ堀切に変化したものと考えられる。堀切１の南肩部は，堀切２と共有する肩部と比べると低標高であるが，地形的に平場１と平場２の間は比高差約２ｍの段差があり，この段差を利用し構築されたものと考えられ，平場２個の一部に土塁状の高まりが見られるのはこの段差を補うために盛られたものと思われる。平場２から尾根方向はやや，東南方向に筋を変えるが，これらの平場は尾根の変化点における平溜りの様なスペースであると考えられる。さらに，南東方向に幅の狭い尾根が約50ｍほど続き地形は標高140ｍの地点にかけて急傾斜し，南東斜面には，姫野々城跡の南尾根南端の拡張りである横堀と竪堀がセットで存在しており，南西斜面には単独で竪堀が降っている。これらの縄張りの存在する地点から白雲神社にかけては空堀等の遺構は存在しないことから，姫野々城跡の南限を区画する堀であるといえる。

２．出土遺物

姫野々城跡において出土した遺物には，土師質土器・瓦質土器・青磁・白磁・染付・備前・鉄釘・石硯・渡来銭等がみられる。以下に各遺物ごとにまとめてみたい。

土師質土器は，今回の調査で出土した遺物の中で最も多く全体量の97％を占めている。今回の分類では形態の全容が判る完形品について主に器高で大きく分け，底径指数等で小分類を行ったが中には杯と皿と明瞭に差が認められない物も多く今回は皿として分類を行った。供膳具である小皿・皿・杯の破片が大半であり，その成形技法も全て底部回転糸切りでロクロ成形されたものである。内面にはロクロ目を残すタイプのものが大半である。皿の中には灰白色を呈した手づくねの皿（皿Ｂ類）も若干みられるがその量は僅少で土師質土器の出土量の１％にも満たない。土師質土器の出土地点をみれば，主郭詰ノ段Ａトレンチ西・二ノ段Ｃ・Ｄ・Ｅトレンチからの出土がほとんどであり，特に，Ｃトレンチの堀状遺構，Ｅトレンチの礎石遺構検出面において一括出土している。Ｃトレンチの堀状遺構では，第Ⅲ・Ⅳ層中より完形品が重なるように多量に出土しており一括廃棄されたものと思われる。これらの土師質土器に伴い，瓦質土器の羽釜が同層中より出土しているが，その形態から河内産の羽釜Ｅ型式と考えられ，共伴して出土した土師質土器は15世紀前半代の所産のものと思われる。瓦質土器は前述した煮沸具である羽釜が主として出土しており，その形態もここでは大きく二分類に分けた。Ａ類は，河内Ｅ型式に分類できるものであり，15世紀前半代に比定できるものである。Ｂ類については，河内産のものと思われるが詳細は不明である。No.69は，他の[3]

羽釜に比べ胴部上半から口縁部にかけての器壁が分厚く，河内系の分類でいえばH型式に属するものと思われる。備前焼では調理具の擂鉢，貯蔵具の甕が出土しており，擂鉢の口縁部の形態からⅣ期に比定できるもので15世紀後半代の所産のものである。

輸入陶磁器は，青磁，白磁，染付の出土がみられ，青磁が41％，染付が52％を示し，青磁と染付が圧倒的多数を占めている。青磁は，碗，皿が主であり，碗の中には線描の蓮弁と山形の剣頭との単位にやや乱れが生じている碗(4)（No.77）の様に15世紀後半～16世紀前半代にかけてのものと，体部外面に崩れた雷文帯を持つ碗（No.80）や，外面に界線が見られる碗（No.79）等，15世紀前半代のものがみられ，大きく二時期に分けられる。また，鎬蓮弁文が施され口縁部が「く」の字状に外反する盤（No.82）や，青白磁の梅瓶（No.87）のように，13世紀後半～14世紀前半代にかけての遺物も見られる。白磁をみれば，その出土量は３％と僅少であるが，13世紀後半～14世紀前半代の白磁Ⅸ類である口禿げタイプの皿(5)（No.90）が出土している。染付については皿B_1群，C群を中心とする出土がみられ，中には皿B_2群に属する皿も見られる。染付の皿は全て端反タイプのもの(6)であり，岡豊城跡や中村城跡で出土がみられる皿E群はない。このことから16世紀後半代に機能していた城で見られる皿E群が当城跡で出土していないことから，姫野々城跡の機能していた最終時期は16世紀前半代までであると考えられる。

以上，出土遺物について概観してみたが，これらの土器の帰属時期を整理すると，輸入陶磁器である青白磁の梅瓶，白磁Ⅸ類の口禿げ皿，青磁の鎬蓮弁文の盤等の存在からは13世紀後半～14世紀の一群と，河内E型の羽釜，それに共伴する土師質土器群，備前Ⅳ期の擂鉢，甕，輸入陶磁器の染付等，当城跡から出土した遺物の大半を占める15世紀前半代～16世紀前半代におさまる一群に分けられよう。また，出土地点をみれば，詰ノ段及び二ノ段の主郭部の曲輪で集中しており，特に二ノ段の帯曲輪からの出土が著しく，遺物の大半を占める15世紀から16世紀にかけてこれら主郭部分の改修が進んだものと考えられる。

第Ⅱ章で前述したように，津野氏についての文献資料は乏しく，津野氏自体の由来についても伝承が多く，諸説ばかりで定説がない。ただ，『南路志』にみられる「地頭津野」という記述などから，鎌倉期に入って地頭として封建領主化に成功していったものと思われる。その後，南北朝期の動乱を契機として在地領主としてその地位は飛躍的に発展し，14世紀中頃に新庄川下流，須崎に進出し，15世紀中頃には新庄川全流域の制圧，高岡郡西半部を支配圏に収め五千貫の戦国大名に成長している。この南北朝期～室町期にかけてが津野氏全盛の時代であり，この時代の領主が「十八代記」によると繁高－滋高－春高であり，之高が伊予の河野氏から入って春高の養子となっているが，明徳年間の津野之高は，まさにこの期のピークを示す人物であろう。出土遺物から考えれば，13世紀後半～14世紀代，南北朝期の繁高の頃に姫野々城跡の原形が形造られ，康永元年（1342年）南朝方である堅田氏の須崎岡本城への攻防の時などに布陣を張ったものと考えられる。その後，応仁の乱による守護代細川氏の退転以後は，之高－元勝－元実にかけて戦国大名として津野庄一帯の名主土豪に対する家臣団編成を完了し，土佐の戦国時代突入の中で拠点的な城として確立されていったものと思われる。遺物をみても大半が15世紀～16世紀前半代に位置付けられ，この時期が姫野々城跡の中心的時期であると考えられる。そして，染付皿の中でE群がみられないことから，城跡が機能し

ていた時期は，津野氏が天文年間（1532～1555年）の一条氏との攻防で敗退し，14代の基高が一条氏に降る16世紀前半代までではなかろうか。

おわりに

今回の発掘調査により確認された遺構・遺物から姫野々城跡を大胆に概観してみた。しかし，個々の遺構の規模，性格，時期等の詳細については本報告では不明確な点が多い。

姫野々城跡は来年度も引き続き主郭部分を中心に継続して調査が行われる予定である。今年度の調査結果をふまえ，その実体については今後の調査と研究に期待したい。

《参考文献》

(1) ここで言う「本城」「東本城」「西丸」は，明治28年丈量図に記載されている名称である。尚，「詰ノ段」「二ノ段」は今次調査について呼称するものとする。

(2) 宅間一之他『久礼城跡』　中土佐町教育委員会　1984

(3) 森島康雄「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』　日本中世土器研究会　1990

(4) 真壁忠彦・藍子「備前焼研究ノート１～３」『倉敷考古館研究集報』　1966･1967

(5) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No. 2』　日本貿易陶磁研究会　1982

(6) 森田　勉「14～16世紀の白磁の分類と編年」　上記5)と同じ

(7) 小野正敏「15～16世紀の染付碗，皿の分類と年代」　〃

写　真　図　版

PL 1

姫野々城跡遠景（西方より）

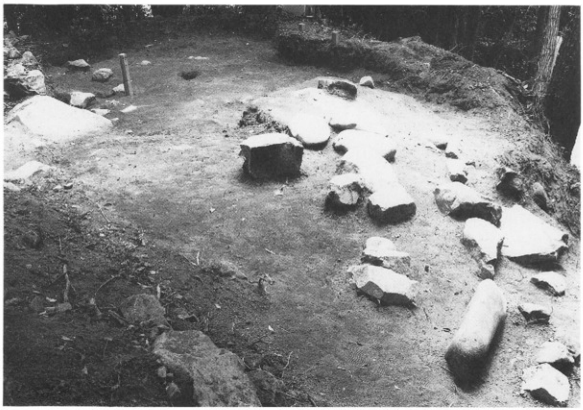
同上（南方より）

PL 2

詰ノ段調査前全景

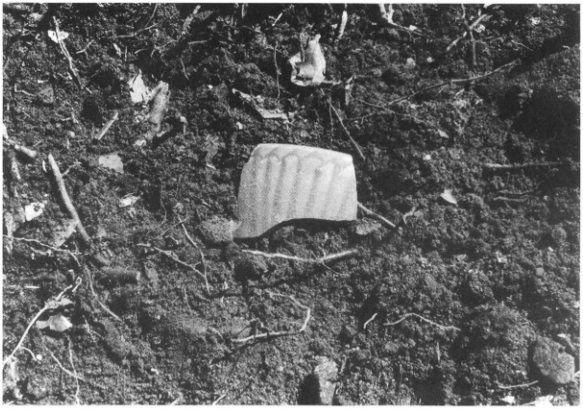
詰ノ段A・Bトレンチ全景（東より）

詰ノ段Aトレンチ東拡張区（東より）



詰ノ段Aトレンチ西拡張区（東より）

PL 4



Aトレンチ青磁出土状況

Aトレンチ染付出土状況

二ノ段Cトレンチ堀状遺構（南より）

二ノ段Cトレンチ石積み部分（東壁）

PL 6

二ノ段Eトレンチ礎石遺構（東より）

二ノ段南壁セクション（北より）

二ノ段Eトレンチ土師質土器出土状況

二ノ段Fトレンチ礎石検出状況（東より）

PL 8

B区伐採作業風景

B区丘稜南尾根部（北より）

B区Gトレンチ（南より）

B区Hトレンチ（北より）

PL 10

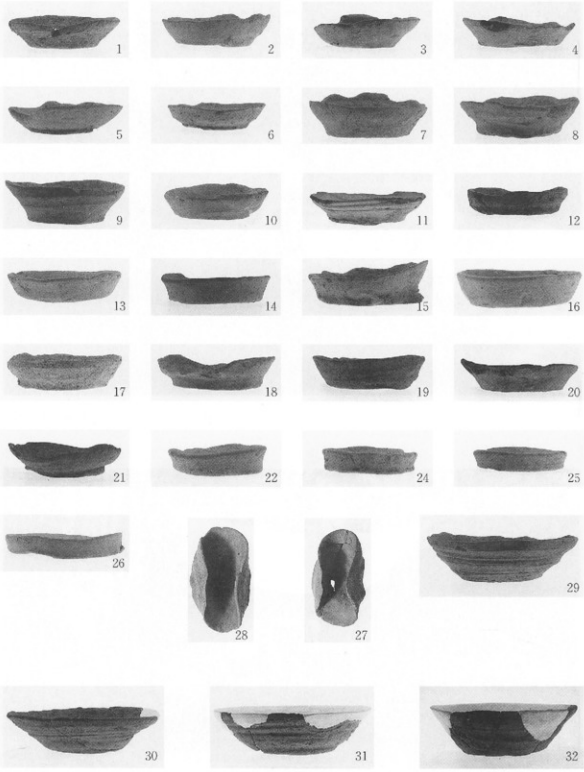
B区Pトレンチ（北より）

B区堀切3（西より）

詰ノ段Aトレンチ調査風景（西より）

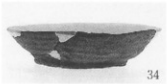
二ノ段Fトレンチ調査風景（東より）

PL 12

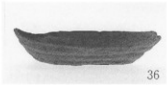


土師質土器1　小皿・耳皿・皿

33


34

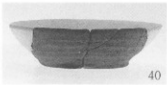
35

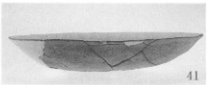

36

37

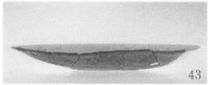
38

39


40


41

42


43

47

48

49

50

51

52

53

54

55

土師質土器2　皿・杯

PL 14

56

57

58

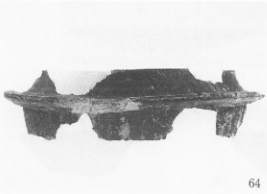
59

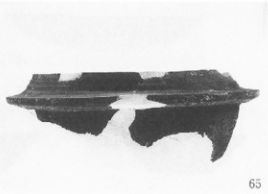
60

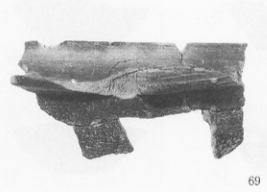
61

62

63


64

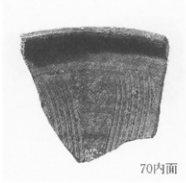

65


69

68

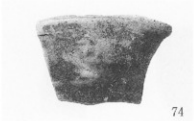
土師質土器3　杯，瓦質土器　羽釜

70


70内面

71

71内面


74

74内面

76

76内面

備前焼擂鉢・甕，瓦質土器こね鉢